

翻訳・フロイス『日本史』1部68～74章

服部, 英雄

曾田, 菜穂美

<https://hdl.handle.net/2324/1793607>

出版情報 : 2017
バージョン :
権利関係 :



翻訳・フロイス『日本史』 1部68章～74章

服部 英雄解説・曾田菜穂美翻訳訳注

Frois “Historia de Japam” (フロイス『日本史』) について、わずかな一部ではあるが、翻訳者の協力を得て、日本語訳を試みた。日本語訳の定本となっている松田毅一・川崎桃太両氏による翻訳(中央公論社刊)との比較が必要だと考えたからである。松田・川崎訳の偉大な成果は、だれしも否定はできないものだが、史料としての重要性・歴史史料としての価値を考慮すると、正確な意味を理解する上でも、複数の翻訳が必要であろう。そのことはこれまでも述べた。

“Historia de Japam”の活字本(刊本)は、現在でこそ国立リスボン図書館本があるが、松田・川崎訳はいまだ活字本がない段階に、写本(原本は過去に焼失して存在しない)の撮影にはじまって、その写真をもとに翻訳したもので、たいへんな苦勞のなかで行われた作業である。

フロイス『日本史』のうち、V部80章については、Gilberto Nascimento (ナシメント)氏による翻訳文を九大リポジトリに掲載した。この短い最終章では翻訳元本にちがいがあって、松田・川崎本の翻訳元写本であるアジュダ図書館本には、リスボン国立図書館本607頁3行目80章GYUEEY以下の7行分が脱落していた。

[http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/18350/Frois\(修正2011.10.17\).pdf](http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/18350/Frois(修正2011.10.17).pdf)

このことをふまえつつ、曾田菜穂美氏の翻訳によって、3部1～6章を以下に紹介し、九大リポジトリにも収録している。すなわち「翻訳・フロイス『日本史』3部1～4章」は、所属する研究院の紀要である『比較社会文化』第20号(2014)に、同5～6章は同じく『地球社会統合科学』第21巻第1-2合併号(2014)に掲載した。

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1456058/p031.pdf>

<http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/1477911/p093.pdf>

今回、その追加作業を行った。服部の定年退職により、以後の翻訳作業は紀要に未掲載であるけれど、その成果をリポジトリ公開する。なお成果は平成23～27(2011～2015)年度基盤研究(B)23320139(代表者・服部英雄)での一部経費によっている。

翻訳箇所は1部68章から74章としている。これまでに紹介した1588年頃よりは20年程遡って1566年頃となる。68～73章は松田川崎訳「日本史」では9巻(西九州編)にあり、74章は第4巻(五畿内篇II)に分かれている。前者にはこんにち「カクレ(潜伏)キリシタンの集落」としてユネスコ世界遺産登録をめざしている地域での、

16世紀後半のキリシタン揺籃期の様相、つまり五島（小値賀）、天草（志岐、志岐麟泉）、平戸（根獅子）、生月また大村などの布教の実態が詳細にわかる点でも興味深い。「当時、会堂はまだ偶像崇拜の寺で」とあるように既存の寺がそのまま教会になることが多かった。五島については中世青方文書によって、狩倉などの島の生活がわかるが、当該章によって具体的にも領主の活動がわかる。

この部分については、松田川崎訳本が依拠した元本（写真版）は凡例によればアジュダ図書館本で、当方が依拠した国立リスボン図書館本（印刷本、もとは古写本9448号）とは、異なるようだ。

以下に既往の訳と曾田訳の異なる点を、曾田訳注によってあげる。わずかとはいえ、意味が正反対になったところや、数や曜日のちがい、センテンスの有・無があった。元本のちがいに由来するものなのかどうかは、ここでは、にわかにはわからない。

なお訳者の世代差があるから、曾田訳の方が現代的で、わかりやすいと思う。

68章

【訳注1】 e na boa filosofomia

〈松田訳〉 身なりが立派なこと

〈曾田訳〉 精悍な顔つき

陸地から遠く隔たったもの寂しい島々ではあるが、住民は言葉遣い、接遇やあいさつ、儀式や礼儀、精悍な顔つき【訳注1】において、彼らの交易相手の住民に少しも劣らない。

【訳注2】 ..das outras ilhas mais politicas..

〈松田訳〉 より快適で

〈曾田訳〉 より洗練された

日本のより洗練された【訳注2】主要地域との交易がない上に、小さな島々なので、

【訳注3】 Está repartida esta ilha em tres e haverá de huma a outra como meia legoa.

〈松田訳〉 この島は三つに分かれており、一つの島と他の島の間隔は約半里である。

〈曾田訳〉 島は大きく3つに分かたれ、それぞれが半レグア程離れている。

69章

【訳注1】 ...cauza de todas as couzas

<松田訳> 「万物の原因の原因」。

<曾田訳> 森羅万象の原因

修道士は、森羅万象の原因【訳注 1】である唯一人の創造主が存在することを、聴衆に示すべく話を始めましたが、

【訳注 2】...pirolas mui bem douradas...

<松田訳> 「よく金を塗った丸薬」

<曾田訳> 金色の弱い解熱剤

熱が少し下がるように金色の【訳注 2】弱い解熱剤をすぐに 3 錠届けたところ、その日は病状が少し和らぎました。

【訳注 3】...hum porco do mato

<松田訳> 「野猪二頭」

<曾田訳> 殿は大変喜んで、イノシシを一頭【訳注 3】、雉と鴨を二羽ずつと、アロサという魚の大型のよりもっと大きく新鮮な魚を 5 匹、酒 2 樽に米一俵を言づけました。

70 章

【訳注 1】...e para este jantar chamou todos os honrados, os quaes vestidos de lustrozas sedas servião com muita ordem à mesa.

<松田訳> そして殿はこの食事に貴人たち全員を呼びましたが、彼らは華麗な絹の着物をまとい、秩序整然と宴席で仕えました。

<曾田訳> 会には五島中の有力者が招かれ、艶のある絹の着物を着て威儀を正して食事をしました【訳注 1】。

71 章

【訳注 1】pagode

<松田訳> 仏像

<曾田訳> 彼らはこの寺【訳注 1】を壊す許可を殿から得て、

【訳注 2】E disserão que vinhão buscar algum merecimento na obra que faziamos

<松田訳> このセンテンス脱落

<曾田訳> そして「ぜひ工事に参加して功德を積みたい」と言って【訳注 2】、

【訳注3】

<松田訳> 「村（人たち）」

*Wicki 氏によれば写本に欠落がある。

<曾田訳> その折土地の領主¹【訳注3】から大量の贈り物を贈られましたので、

【訳注4】...que fica detraz da porta principal da igreja

<松田訳> 教会の背後。

<曾田訳> 教会の正門近く【訳注4】の小高い場所に、

【訳注5】...senão humas suas mui fermozas...

<松田訳> 一軒の

<曾田訳> そして殿自身が所有する、今は使われていないいくつかの【訳注5】美しい家以外、住居を建てないように命じました。

【訳注6】...um cunhado do tono de Firando e vassalo deste como do Goto

<松田訳> 「平戸の殿の義兄弟で、五島の殿の家臣である人物」

<曾田訳> すなわち平戸の殿の義兄弟で、平戸の殿と五島の殿の家臣である男【訳注6】が、五島の殿に反乱を起こしました。

7 2 章

志岐殿の領地は縦・レグア横・レグア【訳注1】。

【訳注1】このセンテンスは、松田訳にはなし。

【訳注2】..., como aquillo era violento, ...

<松田訳> 「だが彼はそれを故意に抑えていたに過ぎなかったから、・・・」

<曾田訳> 殿は数カ月間は悪意を胸の内に納めていたが、なにぶん強力な悪意だったので【訳注2】、

【訳注3】...ao qual o tono apertava e a outros muitos que tornassem atraz,...

<松田訳> 「彼にも他の大勢の人たちと同様に棄教を迫った」

<曾田訳> 殿はガスパーや他の者たちに戻って来るよう圧力をかけた【訳注3】が、

73章

regedor

<松田訳> 村長

<曾田訳> ディオゴという土地の代官にも、

regedor について：これまで松田訳も regedor は代官であった。この先の松田訳で「ディオゴは彼女の家ではもっとも身分の高い家臣であった」と書いてあることとも矛盾。

【訳注1】 Dahi a seis dias poz o Fixo em pax o negocio daquelle christão que tinha tomado a espada ao gentio.

<松田訳> 肥州はその六日後、(かの) 異教徒から刀を奪い、(かくて) かのキリシタンの事件を穏便に調停した

<曾田訳> それから6日後、肥州は異教徒の刀を奪ったあのキリシタンの件を不問に処した【訳注1】。

【訳注2】 ...e com as mãos alevantadas...

<松田訳> 手を合わせ

<曾田訳> 上陸するとみなで行列を作り、両手を差し上げ【訳注2】

【訳注3】 ...a quinta-feira da cea...

洗足木曜日のこと。

<松田訳> 聖木曜日の前の水曜日。

<曾田訳> それから聖木曜日【訳注2】に聖体拝領を受け、

<74章>

【訳注1】 : e assim, não sendo Diogo Fibia Reoquei, pessoa tão principal naquela cidade, que os tomou debaixo de sua protecção, tiveram muito trabalho...

<松田訳> 日比屋ディオゴ了珪は(司祭達)を保護してはいたものの、この(堺の)ではそれほどの有力者ではなかったので…。

<曾田訳> ディオゴ日比谷了珪は町でも指折りの実力者だったが、もし司祭を庇護した

のが彼でなかったなら、司祭をかくまうための通りを見つけることは大変な困難がともなっただろう【訳注1】。

松田訳と曾田訳では意が逆になるが、コンマをどこにつけるかによって、どちらにも読みうる難解な文章とのことである。しかしこの章全体で、日比谷了珪は充分、町の有力者に思われ、松田訳自身も、後の方で「ディオゴが非常に縁者も多く、堺では有力者である」といっている。

第 68 章

1566 年下地方で起こったいくつかの出来事と五島の地誌・習慣について

1566 年

本年 1566 年日本航路の総カピタン（最高責任者）として、シモン・デ・メンドンサが初来日した¹。また 2 人のイエズス会司祭が、ドン・ディオゴ・デ・メネーシスの船でインドを発った。2 人は徳も学識も高いスペイン人で、その内の 1 人アルカラス司祭の目的は中国駐在²、もう 1 人ラミーレス司祭の目的は（日本における）学院の総長および日本イエズス会の総布教長となることだった³。彼らを派遣したのは東インド管区長アントニオ・デ・クアドロ司祭である。彼らのナウは中国到着を目前にして沈み、船体が古いのに過積載だったためだと言われているが、アントニオ・デ・メンドンサ（豊後出身の日本人。アントニオ・ヴァス司祭⁴によりマカオで洗礼を受けた）を始めとする幾人かが次のように証言した：カンボジア人盗人を追跡中のバンカン⁵ 1500 艘よりなる中国艦隊が、海難湾でこのナウと鉢合わせた。折悪しくナウは、その前に巨大な台風に襲われ、マストをなくし舵を破損していた。両者は 3 日 3 晩戦い、ナウの乗員は勇敢に戦って大勢を殺したが、中国船の数が余りに多かったため、退けても退けてもまた争いが再燃する有様だった。結局味方のほとんどが疲れ果て、死ぬか深手を負ったところに、中国人が乗り込んできて、商品を略奪した上で船を沈めた。その後に見た者はいない⁶。

平戸

¹ Cf. Boxer, *The Great Ship* 31-33. 1574 年に二度目の来日 (ib. 38)。

² ナヴァラフス（スペイン）出身フェルナンド・デ・アルカラス。1558 年 8 月 13 日アルカラスにてイエズス会に入会、1559 年叙階された。1564 年リスボンに向けて発ち、1565 年同地からインドに発った。1566 年インドよりマカオに

向かったが、道中シャム湾で死亡した (*Documenta Indica* VI 18*808)。

³ サフラ出身ペドロ・ラミーレス (1529 年 12 月 29 日生まれ)。サラマンカで 1555 年に入会、1564 年ゴア到着、サン・パウロ学院の総長を務めた (1565-1566)。アルカラス司祭と同じく水難にあい死亡 (*Documenta Indica* VI 15* 844-845)。

⁴ 1526 年レイリア出身。1548 年イエズス会に入会、テルナテ、ゴア、ダマン、タナ、サントメ (マイラプール) やコラムで活動。1599—1600 に死亡。モルッカで上級司祭までつとめたアフォンソ・デ・カストロ司祭とは対照的に、イエズス会を一度脱会させられたが、1559 年に再入会を認められた (SEB.GONÇALVES, *História* I 463³)

⁵ バンカン (ジャンクより小さい中国船)。マレー語の *vankam* より。(DELGADO II 402; WICKI, *Lista de moedas, pesos e embarcações do Oriente, composta por Nicolau Pereira S.J. por 1582*, in *Studia* 33 [1971] 148)

⁶ *Documenta Indica* VIII 254-255, 599-601 も参照。

平戸のキリシタンは一途に情熱的に活動している。かの地の司祭⁷は今年住民 110 人に洗礼を授け、ドン・ジョアンとドン・アントニオ兄弟⁸とその妻たち、またその他大勢のよきキリシタンが、毎夜連禱を唱えるために教会に通って、他のキリシタンたちを感化している。ベルキオール・デ・フィゲイレード司祭は、救済について耳を傾ける者がいると見込まれるドン・バルソロメウ領の手熊⁹に向かった。10 月にはルイス・デ・アルメイダ修道士が、福田からコスメ・デ・トーレス司祭の駐在する口之津に向かった。

司祭は熱心にまた注意深く、キリシタンや子どもたちを導いている。司祭の努力により住民は驚くほど教理をよく把握し、デウスの事績にも親しんでいる。そして朝にはミサ、正午には詩篇やオラショを覚えるため、夜には連禱を唱えるために、日に都合 3 回も教会に通って来る。よき習慣を定着させられるようにとの配慮から、人柄がすぐれ信望のある男が日本語の読み書きの教師として招かれた。

降誕祭¹⁰が近づいたため、司祭はその 15 日前に悔悛の秘蹟について説教をするよう指示を出した。このよき老人は病に冒されている上に、多くの役目を抱えていたが、300 人もの告解を聞いた。

今年かの地では復活祭¹¹も催された。しかるべき荘厳さを兼ね備えた日本で初のキリシタン行事だった。夜明けには通りの多くが木や枝で森のように飾られ、夜には一晩中聖劇が催された。

その折にベルキオール・デ・フィゲイレード司祭もここを訪れたので、島原から 10 人のキリシタンが、司祭のミサや説教を聞くためにわざわざ口之津までやって来た。このことは上級司祭にも好ましいことに思われたので、フィゲイレード司祭はしばらく彼らと過ごすために島原に向かった。

五島列島

シナから日本に向かうと、平戸湾の沖合 40 レグアほどのところに、五島と呼ばれる島々¹²がある。そこは塩と魚だけはふんだんとれるので、肥後や肥前の者がここから塩や魚油、干魚や塩漬けの魚を得ている。また広々とした鹿の狩場があつて、相応に腕のよい猟師もいる。陸地から遠く隔たったもの寂しい島々ではあるが、住民は言葉遣い、接遇やあいさ

⁷ バルタザール・ダ・コスタ (*Cartas* 1575, 262v: ジャコメ・ゴンサルベス, 1566 年 3 月 3 日平戸発信書簡)。

⁸ ドン・ジョアン籠手田とドン・アントニオ・籠手田

⁹ 手熊 (大村)。Cf. *Cartas* 1575, 250r; ANESAKI 99

¹⁰ 1565 年 12 月 25 日 (*Cartas*, 250v)。

¹¹ 1566 年 4 月 14 日。

¹² 主な島は、福江島、中通島、若松島、奈留島、久賀島。「ゴ」は五、「シマ (ジマ)」は島のこと。

つ、儀式や礼儀、精悍な顔つき【訳注 1】において、彼らの交易相手の住民に少しも劣らない。また住民全員が従っている殿さまがいて、家臣団や召使をかかえ、寺には教育を担う多数の僧侶がいる。しかしながら日本のより洗練された【訳注 2】主要地域との交易がない上に、小さな島々なので、住民は概して貧乏で、塩・油・魚と引換えに彼らが欲するのは、米・小麦・大麦と日常の衣類のための布地である。

日本では天然痘が珍しくないが、五島の人々はこの病を（ちょうどわれわれがペストを毛嫌いするように）忌み嫌う。そのため妻子や夫・家族が罹患すれば、家を出して連絡を断つ。どういうことかという、人里離れた林の中に藁小屋を建てて、病人が死ぬか完治するまでそこで治療し、食べ物を運ぶのである。完治した後も、殿と接したり殿に仕官したりする人間であれば、一定の月数が経つまで屋敷に入ることは許されない。これとよく似た風習として、日本では一般的に貴人や館で仕える人間は、妻子の死後 30 日から 40 日間は主君の屋敷に出入りできない。死を不吉とみなすからである。そしていよいよ勤めを再開する際には、からだを清め衣服を改めなくてはならない。

他にも五島にはおかしな風習がある。島民は「くしゃみ」を特別なしるしと捉え、ある者が殿と面談する予定だったり、参上を命じられたりしていても、「今朝はくしゃみが出たので伺えません」と言えばその日は免除される。またすでに訪問中でもくしゃみが出れば、話をせずに帰宅する。

島¹³は大きく 3 つに分かれ、それぞれが半レグア程離れている【訳注 3】。住民の数は多く、川には澄んだ水が流れる。島の大きさは、ある場所では幅約 12 レグア、他の場所では約 10 レグア。殿の住むこの島はとても涼しくて狩の獲物も多く、館をそこに構えているのもそのためである。殿のいる町では住民の大半が殿に仕える貴人で、洗練され礼儀正しく、また非常な偶像崇拝者で極めて迷信深く、あらゆることを何かの前兆ととらえる。そのため「ある時にすべきこと」、「何かを避けるべき日」や「縁起の悪い時間帯」について数多くの迷信がある。生まれた時からこのような迷信を信じ、儀礼や気遣いじみたことに振り回されて一生を送るのは、いかにも悪魔の手玉にとられており見るに忍びない。

殿の住む町にはいくつか大きな寺があり、その内の一つには現世の福を司る「大黒」という神が祀られている。この神は 2 俵の米俵の上に乗っかって袋をかついでおり¹⁴、住民の篤い信仰を受けている。

彼らは貧しい上に、悪魔にたぶらかされており、悪魔は彼らを困らせれば困らせるほどますます彼らより恐れられ敬われる結果となっている。五島は日本国中で最も異教の儀式と悪魔の迷信がはびこっている土地で、住民は一様に貧しく必要物資にも事欠くというのに、わずかしかとれない米の大半を、祭りや供え物に浪費してしまう。そうすることで悪魔を宥めその好意を得られると考えられるからだ。とくに製塩をする村にこのような迷信の蔓延が甚だしく、彼らは塩焼きのための木や薪を切る時にも、最も好条件で涼しく気持

¹³ *Cartas 1575, 251v.* Cf. 注 12

¹⁴ 七福人の一人。富をもたらす神 (RAMMING 546)。

ちのよい場所を山ごと（またはその一部分）、畏敬と信心から、手つかずで残す。そうやって最も高く枝の張った最良の木々を神に捧げることで、塩焼きの際に煮え湯を飲まされるのを防ぐのだ。異教徒はこれらの山から、たとえ薬を得るためであっても、枝一本切る勇氣はないし、またもし切らざるを得ない状況になれば大きな代償を支払う。というのは、一つには、このような罪深い行為と無分別によってたいてい彼らは何らかの凶事に襲われ、神罰を受ける。もう一つには、木や枝の伐採によって犯した罪を償うために、彼らは特定の木を植林する義務を負い、それに伴って数々の儀礼や出費も課される。このような迷信により、また彼らが困った時に神々に様々な（木を伐らないというような）誓いをすることによって、涼やかで見た目にも気持ちのよい山が自然のままで残されている。

島々を治めている殿¹⁵はすでに 50 を超えているが、ある時この殿が病気にかかった。そこで当時横瀬浦にいたコスメ・デ・トーレス司祭のもとに、司祭と一緒に働くディオゴという医者をおこしてもらえないかと要請があった。ディオゴはよきキリシタンで、日本の文字や諸宗派に通じ、またカトリックの教義についてもなかなか明るい男だった。司祭がすぐに彼を往診に向かわせたところ、危険な状態にあったにもかかわらず治療によって病気は数日間で快癒した。

その折のことだが、日本人は根っから好奇心が強く、ディオゴの方にもぜひ新知識を広めたいという気持ちがあった。そこで殿や殿の親戚たちは、司祭が広めている新奇な教えについてこの男から聞き出そうとした。男はこのように答えた。「ご存じの通りわたしはキリシタンとなりました。ですから、デウス様の偉業や奇跡について、また日本の諸宗派がデウス様の教えに比べてどれだけ馬鹿げていて劣っているかについて、司祭様たちのように伝えるだけの知識と言葉が、せめていくらかでもあったらよかったです…」【訳注 5】と。そしてきわめて断片的にはあるが、世界の創造や靈魂の不滅について彼らに伝えるとともに、説教者の派遣を司祭に頼んでみるようアドバイスした。そうすれば入信を希望する者が救済のために何を信じ何をすべきか、より具体的に明確に学ぶことができるからだ。殿と何人かの貴人はこの説明と忠告を聞いて大変喜び、彼らの欲求—デウスについてより詳しい話を聞きたいという強い願望—を司祭に伝える適任者は、今まさに司祭のもとに帰るディオゴをおいていないだろうと判断した。そこでそのための尽力を彼に頼み、あちらからの回答を待つこととなった。

トーレス司祭は彼らの願いをぜひ聞き入れたかった。司祭自身にとっても、現世における何よりの慰みとなるからだ。だが折悪しく派遣できる説教者が 1 人もおらず、ジョアン・フェルナンデス修道士も、ドン・バーソロメウ領からやって来た人々に説教を聞かせたり授洗したりするのに忙しかった。そうして 2 年を超える年月が流れたが、本年（1566 年）になってようやく、ルイス・アルメイダ修道士と日本人の説教師¹⁶ 161 人が五島に差し向けられることに決まった。その日本人は、まさにこのような事業に携わらせるためにデウスか

¹⁵ 五島スミアキ（ダンシュ）【訳注 4】

¹⁶ ローレンソ了齋

ら賜ったものだろう、天賦の才能と愛きょうを有していたのである¹⁷。

ベルキオール・デ・フィゲイレード司祭は島原に向かった。間際に大雪になって、寒さも大変厳しくなったので、天候が回復するまで出発を数日間遅らせなければならなかった。島原に着くとキリシタンから盛大な歓迎ともてなしを受け、さらに土地の領主からも同様の歓待を受けた。

【訳注 1】 e na boa filosofia

<松田訳> 身なりが立派なこと

【訳注 2】 ..das outras ilhas mais politicas..

<松田訳> より快適で

【訳注 3】 Está repartida esta ilha em tres e haverá de huma a outra como meia legoa.

<松田訳> 「この島は三つに分かれており、一つの島と他の島の間隔は約半里である」。

【訳注 4】 Danshu は淡州すなわち宇久純定のこと、この当時島を治めていた殿も宇久純定であるらしいです。(スミアキは不適切なようです)

【訳注 5】 Eu me tenho já feito christão, folgara de ter sciencia e palavras com que vos podesse declarar alguma couza dos misterios e maravilhas grandes que os Padres pregão, e quam rediculozas e baxas são as seitas de Japão, comparadas com a ley de Deos.

<松田訳> 「私はもうキリシタンなのです。そして伴天連様方が説いておられる秘儀とか大きい不思議について、いくらか御身らにお話しできるための知識と言葉を持ち合わせていることを嬉しく思います。それにしても日本の宗教はデウス様の教えに比べてなんと笑うべく低級なものでしょうか」

¹⁷ 出典： ルイス・デ・アルメイダ 1566年10月20付書簡 (Cartas 1575, 250r-251v) ; コスメ・デ・トーレス 1566年10月24日付書簡 (ib. 240r-v)

第 69 章

ルイス・デ・アルメイダ修道士がいかにして五島での改宗に着手したか

この島で起こった出来事の推移がより鮮明となるよう、アルメイダ修道士の文章¹をそのままここに書き写そう。

「1566年1月15日、口之津にて乗船し、沖合約35レグア²に位置する五島に向かいました。道中ドン・バルトロメウ領内の福田港に立ち寄り、終日悪天候からの回復を待ったのですが、その間キリシタンたちが2レグア程の道のりを歩いて、贈り物を持って訪ねて来てくれました。明朝まだ受洗していない子どもたち10人を連れてくるので、授洗してやってほしいというのです。わたしは、船が小さく、わたしの方から出向けないことを詫び、ここまで連れて来られるのであればぜひとも授洗しましょうと答えました。翌朝未明天候が回復したので、船長が出発を望みました。わたしはなすすべもなく、彼らへの加護を主に祈りつつ出立しましたが、大変な骨折りをして訪ねて来てくれた者たちの力になれず胸が痛みました。

五島では殿の居住する島³の、とある港に着きました。土地の習慣にならいさっそく、殿のために来訪したことを告げようと使いを送りましたが、相手方の意向がはっきりするまで下船はしませんでした。そうしたところ殿は狩に出ていて不在だと分かったので、乗ってきた船で一昼夜待つことになりました。しかし余りに長いこと待たされるので、例のごとく、われわれのいるところ、必ず争いが起こり破壊が生じると吹き込んで、われわれへの上陸許可の交付を阻もうとするわれらが宿敵一坊主たち一の謀略ではないかとの疑念が生じ始めました。

こうして不安な気持ちでいたところ、主が殿の伝言をもたらすことでわたしをお慰め下さいました。その伝言には、わたしを歓迎するからすぐ下船するようにと書かれ、日本人がよくするようにたくさんの挨拶の言葉が記されていました。さらに「貴公はこの島は初めてなのだから、某所に寄宿するがよい」とも書かれていました。そこでわたしはできる限り威儀を正して殿を訪問しました。日本人は誰かを尊敬するかどうかを外見によって判断するからです。実際五島の殿もわたしに対して、そうしたと思われます。そして五島の殿も同じようにして、この訪問のすぐ後にわたしのもとを訪ね返し、先の訪問に対する謝辞を述べました。とは言っても、この辺りで殿との挨拶は終わり、その後は毎日にわれわれの間に友情が育ったので、土地の貴人たちも次第にわたしの宿を訪れるようになりました。わたしは殿や島の住民たちの好意を得ることを切望し、彼らがデウスの教えをよろこび、救い主について知るに至るよう、絶えず主に力添えを祈り願いました。

¹ 1566年10月20日志岐発信書簡: *Cartas* 1575, 251r-254v

² *Cartas* 1575, 251r

³ Ojika(大値嘉) (ANESAKI 94)。 *Cartas* 252r では Ochicua。

彼らの暦での新年を間近に控え、あらゆる者が忙しくなる時期であったこと、また殿からの許しがまだ得られていなかったこともあって、彼らへの説教は一時見合わせました。そして祝い事後 15 日間も、死を喚起したり日本人を悲しませることのないよう、救済の話は一切しませんでした。

その後数日間にわたり、主デウスの思し召しにより、全身とくに胃に鋭い痛みを感じ、わたしは食べたものをみな吐いてしまいました。けれども今こそよき事業を開始すべき時とのご判断を下されたのでしょう、主はまたわたしに健康をお返しになりました。丁度その頃、日本の習慣に従い、島の主だった貴人たちが年始の挨拶のため当地に集まっており、わたしは彼らと少しずつ知り合うようになりました。彼らが根っから礼儀正しく教養があることに心からの満足を覚えました。もし彼ら全員がキリシタンとなってくれば、このうれしさはさらに増すことでしょう。ただ彼らとわたしの間には、「坊主」という大きな壁が立ちはだかっています。彼らと坊主は親戚同士で、互いに血縁関係でしっかりと結ばれているので、そのことをよく理解している者なら、主の強力な加勢なくては島の貴人たちの改宗はとても望めないことが分かるでしょう。

彼らにとっての新年に当たる新月の日から 15 日が過ぎ、いよいよ救済について話すべき時が来ましたので、殿に使いを送り次のように要請しました。どうか島々の貴人がちょうど一堂に会している今を逃さず、彼らを 7 日間の説教に招いてほしい (7 日間というのは日本人が説教を聞いたり、薬を飲むのによく用いる期間です)、その説教の中で、なぜわれわれが遠路はるばる日本に来たのか、その他にもまだ知られていない面白く有益なことを話すつもりだ、また現在寄宿している家屋は狭いので、どこか適切な場所を見つろってほしい、さらに部下たちがより熱を入れて話が聞けるよう、殿自身にもぜひ一緒に参加してほしい、などということです。

殿は二つ返事で承諾しました。翌日にはまた殿から伝言があり、集会には自分の所有する建物の一つを使えばよいこと (それは島にある最良の宿泊所でしたが、跡取り息子が僅か 25 歳でそこで死んだので、縁起が悪いとみなされ使われていませんでした。町の中心部の最良の地点にあります)、翌日、つまり金曜日に開始すべきこと、奥方も聴講したいので日が暮れてから始めてほしいことなどが伝えられました。わたしは「仰せの通りにいたしますので、お揃いになりましたらお知らせ下さい」と答えました。

金曜日の午後、わたしは日本人修道士と一緒に万全の準備をしました。この修道士は 14 年前からイエズス会に属し、会の中で最も話術に長け、教えにも精通し、日本人から知恵者とみなされている男です⁴。使いが来たので、われわれは定められた建物に向かいました。灯りの灯された大きな部屋に入ると、中には 400 人近い男がおり、隣室には女もいて、万事が説話のためにちょうどよく整えられていました。建屋は非常に清潔で畳が敷きつめられ、一部が高くなっており、殿は壇上に登るようわたしたちに促してから自身もそこに着

⁴ ローレンソ。 *Cartas* 1575, 252r。「14 年」については : ib. 240r; トレス司祭の書簡では 16 年。

席しました。

全員が着席し静かになったところで、わたしは修道士に、本題に入る前に明快で理にかなう話をして、聴衆を説話の世界に引き込むよう働きかけることを命じました。そして日本語が堪能でないため、わたしは説教できないことと、今から修道士が話すことは、もし日本語ができれば、わたしが話したであろうことと同じであることを述べて、彼らに詫びてから、開始の指示を出しました。

修道士は、森羅万象の原因【訳注 1】である唯一人の創造主が存在することを聴衆に示すべく話を始めましたが、彼の話術の巧みさや愛きょう、また理路整然かつ自在に話す有様に目を見張りました。というのは彼は、聴衆が信じている偽りの神々の意見に反駁しつつ、この偽りの神々がこの世でも来世でも、彼らを助けようがないことを筋道立てて示していたからです。内容はわれわれが常日頃話していることと同じですが、それを理解させるための才気と言葉の平明さが際立ち、話を聞くものは誰でも同意せずにはいられないほどでした。彼こそがローレンソです。ある時は聴き手の理解を深めるため、あたかも彼自身が異教徒になり代わったかのように、先だつての自分の議論に疑問を投げかけておいて、次にその疑問への答えを簡明に示しながら聞き手の疑いを晴らしていきました。しまいには（説教は3時間続いたのですが）聴衆はみな感嘆し、「デウスこそ、われわれが敬い慕うべき神に違いない」と口々に述べるまでになりました。最後にわたしは、「教えについて分からないことがあれば、いつでも遠慮せずに聞いてよく内容を理解してほしい。また大いにあなたたちの役に立つだろうから、今後の説教にも参加してほしい」と伝えました。

殿の指示によって聴衆は退出しましたが、殿自身は残って「万物をお造りになった方がただ一人だけ存在すると考えざるをえない」と言いました。そして心より満足して別れを告げるとともに、この先行われる説教もすべて部下と一緒に聴聞したいと言いました。

ぜひキリシタンとなって、説教を通して聞きたいと多くの者が切望していましたが、わたしの犯した罪によって、翌日殿が重い病気になりました。高熱と頭痛、さらに全身の痛みに襲われたのです。生来丈夫で稀にしか病むことがない男が、余りに苦しむので、今度ばかりは翌日までつまいと周りの者たちは噂しあいました。

すでに申しましたように、五島の住民は迷信深く何事にも縁起をかつぎます。そこでこのような深刻な知らせに接し、坊主にも吹き込まれて、「昨日デウスの教えを聞いたり、伴天連に便宜を図ったりしたから、神々の怒りに襲われたに違いない」と噂し始めました。そしてデウスの教えは悪魔の教えだとか、その他にも罰当たりなことを口にしました。

わたしを訪ねて来る者はいなくなりました。彼らがわたしを呪われた者とみなし、神仏が殿に憤り罰を下した原因はわたしにあると考えているのが痛いほど分かりました。彼らは殿を敬愛し、あたかも父親のように考えていますので、即座にわたしを殺さなかったことが本当に不思議なくらいです。

これがわたしの経験した最もつらく身を切られる試練の一つでありました。わたしの魂は言葉にできないほど打ちひしがれ、すべてがデウスのご意志であると理解して自らを慰

めようとしても、またこのようなことは初めてではなく、以前に新規布教のために遣わされた他の土地でも同様の災難に見舞われたこと、さらに過去にも悪魔が仕掛けた、人が手をこまねくしかない最悪の事態や難儀の中にあっても、主が必ず抜け道を用意して下さって万事丸く収まり、それどころかより大きな果実が得られていたこと等を思い起しても、決して癒されることはありませんでした。わたしは様々なことを思い出していましたが、使徒たちの信仰のあの堅固さ（「わたしは慰めに満たされており、どんな苦難のうちにあっても喜びに満ちあふれています」⁵）に比べ、自身の徳のなさや信仰の浅さが思い知らされ、恥じ入り困惑するばかりでした。どうしても次のような考えを振り払うことができなかつたのです。もし殿が死ねば、日本にいるキリシタン全員がどれほど困惑することでしょう。他方で異教徒は、彼らの神々への信心をどれだけ深めることか。またこのような奇怪な出来事—ちょうどデウスの教えを優遇し始めたとたん殿が命を失うこと—を目の当たりにして、彼らはどれだけわれわれの教えを見下すことでしょう。事実、殿はこれまでの誰よりも教えに理解を示してしてくれた日本人の一人であり、本人だけでなく奥方や身内の者、さらに家来にまで説教を聞くよう勧めてくれたのみならず、自ら労をとって彼らを集めてもくれたのです。こうしたことについて坊主たちがイライラを募らせていたことは言うまでもありません。

このような状況でしたから、ついには主イエスの足元にひれ伏し、どうかわたしの罪がこれほどの好ましい状況を暗転させ、これほどまでに大きな災いの種となることをよしとなさらないようにと懇願するまで、わたしの心は一時も休まることはありませんでした。けれども魂の奥深くから一心に、殿の肉体と霊の健康を祈ったところ、主はわたしに大きな慰めを与えて下さり、殿が死ぬことはないという信念をもたらして下さいました。それはまるでわたしが自分自身に言うかのようなようでした。「われわれの救い主であられるデウスがそのようなことを容認され、殿の死をお望みになるはずがない⁶」と。こうして遂には慰めを得、このたびの病から殿が死ぬことはないとの確信を得ましたが、それでも回復を願う気持ちが余りにも強かったため、まだ幾らかの苦しみを味わいました。

土曜日の明け方 3 時頃、容態は急変し、殿は胸の痛みを訴えて苦しみ始めました。そのため祈祷によって神々を宥め病からの平癒を得ることと、彼らが非常にありがたがる教典を読むことが、全ての坊主に命じられました。そのためにはまず贖罪が必要なので、晩には男たちが「殿の回復のために、明日、釈迦の一生や奇跡について書かれた法華経⁷を読むので、禁止されたことを控えるように」と町中に触れ回りました。禁止されたことというのは「肉食しない」「同衾しない」等の形式的事項です。

翌日曜日早朝から坊主たちは正装して、八幡と言う神社に行きました。そこで弟子によ

⁵ コリントの信徒への手紙 7 の 4 (*Cartas* 1575, 253r)。

⁶ *Cartas* 1575, 253r に impossible (訳注： 原文に possible とあるが写本の間違いか)。

⁷ *Saddharmapundarika* (RAMMING 412)。宣教師がよく言及するインドの経典。

って書かれた釈迦についての書物を読む手筈となっていました。その書物は 4 人の男が抱えても抱えきれないほどでした。これほど膨大な経典を丸ごと読むことはできないので（それらのうち『法華経』以外を『大般若経⁸』と言います）、各巻につき半ページずつ読むことにして、次々と頁を繰って行き、最後に次のように言いました。「この度の読経の功德により、殿が健康を取り戻されんことを」。その他にもここでは述べない種々の儀式とともに読経が行われましたが、彼らはこのようなやり方を固く信じ、これこそが病を治す特效薬で健康を確実に取り戻せる方法だと信じているのです。そして通常金持ちや地位のある者など、多額の布施をくれるであろう人間のためにしか読経しません。

この時点まで島の主だった貴人たちは、殿の言いつけに従って、デウスのお話を聞くために待機していましたが、この儀式の後、失意のうちに帰宅しました。町での滞在が長くなり過ぎていたからです。彼らが救済のお話を聞かずに帰って行くのを見たわたしの悲嘆と狼狽はさらに大きなものでした。

翌月曜日、殿の容態はこれまでにないほど悪化しました。わたしは殿に伝言を送りましたが、館の者は誰も受けとってくれませんでした。わたしは悪魔の練り上げた陰謀について思いを巡らし、この先、殿はきっと治癒するだろうが、その栄光は釈迦や坊主、はたまた彼らの教典に帰せられるだろうと予想しました。そのことは異教徒や信仰薄弱なキリシタンにとっては、デウスの教えの凋落を意味しましょうし、われわれが殿から得られる最大の恩恵といえ、みすばらしい船を与えられて島を退去させられることでしょう。しかし病は悪化の一途をたどり、彼らの神々も儀式も効果がなさそうでした。そこでわれわれの主デウスはわたしにある欲求—それまで頭によぎったこともない考え—をもたせ給いました。それはわたしを寄宿させてくれていた島の貴人に、殿への伝言を依頼し、わたしが多くの薬や治療経験を持っていることと、館での診察許可を望んでいること、さらに天地の創造主の御名において殿の快復を願っていることを伝えてもらうというものです。わたしは主に強く励まされ、駆り立てられるように伝言を依頼し、貴人はこのよき知らせを、熱と痛みで休むこともままならないでいる殿に大急ぎでも届けました。その伝言を聞き一縷の望みをもった殿は、わたしに礼を伝え、今にも死にそうなのでぜひ薬を持って来てほしいと頼みました。

わたしはどこに行くにも必ず数種類の薬、中でもこれまでに試してみて薬効が確かだったものを、日本人のものもわれわれのものも、何らかの緊急事態に備えるために持ち歩くようにしています。けれどもこれらを異教徒の大名には極力与えたくありません。なぜなら効果がなければ薬のせいとされますし、効果があった場合でも、薬のせいとは信じてもらえないからです。ですから殿にも、もしこの時不意にわたしを突き動かした抑えがたい衝動がなかったなら薬を進ぜようとは思っていませんでしたと伝えました。

翌日殿のもとを訪ねましたが、病に苦しむ様子は本当に胸の痛むものでした。わたしは

⁸ インドの経典 Mahāprajñāpāramitā (cf. RAMMING 202)。書簡集には DAIFANA とある (*Cartas* 253v)。

日本人がよくするように仰々しく脈をとった後、病気の原因を説明し、創造主がお望みになれば快復の望みがありますと伝えました。そしてわれわれの習慣に従って（ただし時間がなかったので手短かに）説教をしました。最後に服用方法を伝えた後、薬を届けさせるために帰宅しました。

熱が少し下がるように金色の【訳注 2】弱い解熱剤をすぐに3錠届けたところ、その日は病状が少し和らぎました。翌日にも脈をとって熱が下がっていることを伝え、生命をお与え下さった方のみが、全き健康をもお与え得ることを殿に思い起こさせました。さらにわたしが殿のためにそうしているように、殿自身も創造主の許しを乞うてほしいとも頼みました。午後になって頭痛が激しくなったので夜に館を再訪しなければなりません。そこで痛みの原因を説明し、痛みを和らげて眠られるような頭痛薬を調合しました。この薬については既に経験があったので、「どうか創造主を心より頼んで下さい、そうすれば痛みはすぐ治まってよく眠られることでしょう」と伝えました。病人は大人しく言うことを聞いていました。10時に容態を聞きにやったところ、就寝中との返事を得たので、わたしも休みました。

翌日また戻って脈をとり、「どうか天地の創造主に感謝を。主は殿に健康をお返しになることを望まれました。もう心配ないことをお伝えします」と伝えました。殿は「自分でもよくなったと思うが、少し体力が落ちたようだ」と言いました。わたしはこれまでよりも長い話をして、彼らの信じる神々に効果がなかったことを思い出させるとともに、この度の効果も力もすべて天地の創造主にあることを伝えて辞去しました。

殿は大変喜んで、イノシシを一頭【訳注 3】、雉と鴨を二羽ずつと、アロサという魚の大型のよりもっと大きく新鮮な魚を5匹、酒2樽に米一俵を言づけました。殿の奥方も別の贈り物を遣わし、殿の庶子の一人⁹もそうしましたので、家中は贈り物で一杯になりました。このように食べ物がふんだんにあったので、殿ともう一度親しくなるために、「創造主のおかげで殿がご快復されたのですから、ぜひとも一緒にお祝いをしましょう」と言って殿の重臣の何人かを家に招きました。わたしがこのような祝いを催したことを知って、殿は大変喜び、わたしが殿のことを大切に思っていることがよく分かると言いました。それ以降、わたしは従前のように訪問を受けるようになりました。

わたしの方でもちよくちよく殿を訪ね、辞去する際には必ずわれわれの習慣通りデウスのお話をしました。けれどそうは言っても、殿自身もかれの部下たちも、一体病気が治ったのは彼らの神々の書物のせいなのか、それともわたしの薬のせいなのか、決めかねている様子でした。しかし彼らは彼らの偽りの神々を深く信じているのですから、このことは驚くには値しません。

10日か12日たったころ、すっかり殿が快復したのを見て、「率直にお話ししたいことがあります」と伝えました。そして当地ではもはやわたしにはするべきことがないことや、他の国々には救済を欲し教えを待ち望んでいる人たちがいるので、コスメ・デ・トーレス

⁹ 左衛門大輔ドン・ルイス

神父が本来ならわたしをそこに遣わしたがっていることなどを述べました。殿はすぐに理解し、さっそく翌朝「本日の午後説教があるので集まるように」と触れを出しました。そしてわたしには、「どうか前回と同じ要領で話をするように。わたしはまだ出席できるほどよくなっていないが、代わりに弟と息子を行かせよう」と伝えました。

午後（四旬節のすぐ前の日曜日でした）¹⁰、もう参加者が集まっているので来場するようにと知らせを受けました。今回も殿の奥方や、土地の貴人たち全員を含む多数の者が参加しました。そして世界には万物を司る唯一人の創造主がいることを、多くの者が彼らなりに理解しました」。

【訳注 1】 ...cauza de todas as couzas

<松田訳> 「万物の原因の原因」。

【訳注 2】 ...pirolas mui bem douradas...

<松田訳> 「よく金を塗った丸薬」

【訳注 3】 ...hum porco do mato

<松田訳> 「野猪二頭」

¹⁰ 1566年2月24日

第 70 章

この度の改宗事業を阻んだ他の諸々の出来事、および悪魔のさらなる妨害について

「翌日には、前回と同様に¹、一人の例外なく説教に好印象を抱いていましたが、そこに悪魔が駆けつけて得意の奸計を仕掛けました。その結果町に出し抜けに火が起り、たくさんの家が焼けました。また同時に殿の指の一本が腫れあがり、大きな痛みをもたらしました。

このことは島民全員にとって、デウスのお話を聞くべきでないという凄まじいまでの現れでしたので、その日の説教にはごく僅かな人数しか現れませんでした。そして翌日には誰も来ませんでした。けれども殿は指の痛みを耐えかねて「もし薬をもらえたら大変ありがたい」という伝言をよこしました。わたしの薬を信頼していたのです。わたしの方では、殿の意志を強め、薬への殿の信頼を救い主への信仰に結びつけることしか望んでいませんでしたので、早速指の薬をことづけました。すると主は殿に健康をお返しになることを望まれ、殿からは謝礼として贈り物が届けられましたが、わたしは浮かぬ気持ちでそれを受け取りました。

結局のところわたしには腹を決め、デウスのご意志に従うしかありませんでした。なぜならこのように甚だしい逆境は、大いなる目的があつてのことに違いないからです。始めに殿、続いて町²の住民たちの熱が冷め、非常に稀に、過去の友情のために仕方がない場合を除き、わたしと目を合わしたり会話したりする者はいなくなりました。まして救いについての話しに耳を傾けようという者は皆無でした。

こうして悲嘆にくれていた間、主は、当地から約 50 レグア隔てた平戸駐在の司祭³や、そのもとにいる修道士たちの手紙をもたらしことによってわたしをお慰めになりました。それらの手紙にはかの地におけるキリシタン宗門の発展、司祭が日本語で告解を聞き始めて 250 人が告白したこと、また 50 人が婚姻の秘蹟を授かり、50 人が聖体拝領を受け、さらに 110 人が新たに入信したこと、そしてそれらすべてがこの 40 日ばかりの間であったこと等が書かれていました。その上改宗者の熱意と模範的態度に感化されて多くの異教徒が入信を希望していることや、かの地で最も地位の高いドン・アントニオ、ドン・ジョアン⁴とドン・ルイス⁵が告白し聖体拝領を受けたこと、3 人は非常に信心深く、夜の連祷も欠かさず行うことや、妻や他の貴人たちも一緒に参加していることなどが書かれていました。わたしは以前平戸で迫害があつた時に、一人の貴人を改宗させたことがあつたので、その男について尋ねてみたところ、手紙の伝搬者は次のように答えました。男の父親は息子が

¹ *Cartas* 1575, 254v-257r

² Ochicua (オジカ=大値嘉)。 *Cartas* 1575, 251r

³ バルタサル・ダ・コスタ (ib. 254v)

⁴ ドン・アントニオ・籠手田とドン・ジョアン・籠手田

⁵ 彼らの甥であるドン・ルイス (ib., 255r)

キリシタンになったと知り廃嫡した。その結果男は食うにも困り、身内からは辱められ住民からは迫害を受けている。だが改宗以来 5 年間、何ごとも彼を信仰の道から遠ざけられておらず、召使いや他のキリシタンの家で世話になりながら何とか糊口をしのいでいる。そして主がその尊い約束において公平であることを確信しつつ、進んで現世での苦難を受け入れている。

わたしがこれら修道士たちの手紙から理解したのは、平戸では、土地の名誉ある有力者たちが立派に振舞い、他のキリシタンたちの鏡となっているということです。これは他の土地で起こっていることとは正反対のことです。

前述のようにわたしは、五島の住人にデウスのことを知らせる方策が見つからず、悲嘆と失意のうちにいましたが、ちょうどその頃島から約 75 レグア離れた博多の町から 2 人の商人がやって来ました。彼らは日本の諸宗派に通じていたので、どうせ目新しいことはないだろうと予想しながらも、説教を聴聞してみたいと申し出ました。そして自分たちの誤りに気がつき、思慮深い男らしく教えについて様々な質問をし、答えに満足してからは、このような宝を一刻も早く手に入れようと決めました。彼らはわれわれの聖なる信仰について、いかにして主が尊い御力によってわれわれを悪魔の支配から救い出して下さったかについて、またいかにして計り知れない功德によって、われわれを救うための道を切り拓いて下さったかについて、15 日間連続して熱心に話を聞きました。オラショもすぐ覚え、洗礼も受けました。こうして用心深い商人たちが、生まれつきの信仰を捨て新しい教えるを選ぶのを見て、五島の殿とその部下たちは大変驚きました。このことはデウスの教えについての評判をよくするのに、いくらかでも貢献したと思われます。

その頃五島の人々はわたしと距離をおき、話しかけることはありませんでしたが、ある時主の思召しによって、殿の叔母が重い病気にかかりました。高齢で手の施しようもない状態でしたが、わたしの薬への全面的な信頼と、叔母を大切に思う気持ちから、殿は「もし可能なら叔母の健康を取り戻してほしい、そうすれば心より感謝申し上げる」と言いました。もとよりわたしの方では、殿とのわだかまりを解くことしか望んでいませんでしたので、「御病気の快復につきましては、生命をお与え下さった方の掌中のみにあります、できるだけことはいたしましょう。明朝伺います」と答えました。主はわれわれを御憐れみ下さり、薬を服用させると叔母はすぐによくなりました。わたし自身もこのことにとっても驚きました。というのもわたしが飲ませた薬は、これほど顕著な効果も即効性もないはずのものだったからです。この頃からわたしの名声は高まり始め、聖なる存在とみなされるようになりました。

同じ頃に殿の娘も病気になりましたが、わたしの薬を飲むとすぐによくなりました。続いて殿自身が胃の激しい痛みで襲われ夜中に呼びつけられました。この時もわたしが帰宅

するより早く快復しました。さらに同じタイミングで殿の庶子⁶、甥っ子、弟までが病気になるりましたが、全員がわたしが治療をほどこすと健康を回復しました。

このようにわたしは病人に無償で薬を与え、常に彼らの利益となるように振舞ったので、彼らと再び親しくなることができました。その際にデウスが強力なお力添えを下さり、あれほど難しい病気がすべて単純な薬で治るようお許しくださったことは、わたしを驚きと喜びで満たしました。その後も同じことを、助けを求める人誰にでも行いましたので、わたしが見返りも求めず病気を治すことに住民たちは戸惑いながらも、日を追うごとにわれわれの名声・評判は高まっていきました。

このようなことを続けているうちに、殿はわたしとの親交を非常に喜ぶようになり、わたしも殿のもとを度々訪ねるようになりました。といってもデウスの話をするのはまだ時期尚早と思われ、主が何らかの道を切り開いてくれることが待たれましたので、いよいよその時が来ればより熱を入れて真摯に話を聞いてもらえるよう、できる限りの愛情を示す努力を続けました。殿の親戚たちも頻繁にわたしのもとにやって来ましたが、わたしが身を寄せていた家は、このような大人数を受け入れるには少し狭かったので、殿の所有するいくつかの美しい屋敷—既述のように、殿の指示でわたしが初回の説教を行った屋敷—がわたしに与えられました。申し出を受けなければ殿を落胆させると分かりましたので、わたしは礼を言い、時期を見計らって移らせていただきますと答えました。

前回コスメ・デ・トレス司祭に五島の現状について報告し、住民の心にデウスの教えを刻むのがいかに困難であるかを訴えてから、おそらく 40 日ばかりが経っていたでしょう。司祭からの返事が届き、当初の目的である改宗事業がはかどらないのであれば戻って来るようにと書かれていました。また手紙には豊後の国主からの書状も添えられ、わたしと折り入って話しをしたい旨が記されていました。この書状は、五島の殿が出立の許可を与えるよう、わざわざ返事に添えられたものと思われます。わたしはこれを持って出発の二日前に、殿や奥方、また親しくしていた貴人たちに暇乞いをするべく殿の屋敷を訪ねました。わたしの決意が固いのを見て全員が別れを無念がり、中でも殿は涙を流さんばかりでした。何とか留まってほしいとわたしに訴えましたが、わたしは「上司の命令ですから出発しない訳にはいかないのです」と答えました。

翌日殿は別れのしるしに、これまで日本で目にした中でも指折りの盛大な晩さん会を開いてくれました。会には五島中の有力者が招かれ、艶のある絹の着物を着て威儀を正して食事をしました【訳注 1】。食後、彼らへの別れのしるしとして、「すべての人間は天地の創造主からの絶えまない恩恵にあずかっており、そのために創造主への義務がある」という話をしました。殿は非常に熱心に耳を傾け、わたしは乗船するために辞去しました。

夜が明ければ出立すると知って、翌晩殿と二十才前後の殿の息子⁷がわたしを訪ねて来ました。息子は控えめで分別のある男でした。彼らは夜中までわたしと一緒に過ごし、行か

⁶ 左衛門大夫（ドン・ルイス）。

⁷ 長男は 25 歳で死んでいる（cf. c.69）。

ないでほしいと懇願したり、言葉を尽くして思い留ませようとしたりしました。彼らが言うには、わたしを島に呼びつけ 4 か月間も引き留めておいて、一人もキリシタンになることなく帰すのは、彼らにとって非常に不名誉だということです。

残ってほしいという彼らの欲求がとても強いこと、また日本中で最も平和と言えるこれらの島々で、デウスのために行えるであろう多大な奉仕について考えると、トレス司祭の次の指示を待ってもよいように思われてきました。このことを告げると殿はようやく満足し、島のどこでも好きな場所に土地を提供するので教会を建てるがよい、住居を建てるのも援助する、さらに住民には自由にキリシタンとなる許可を与え、異教徒の祭りへの参加も強制しない等たくさんの保護を約束してくれました。またとある土地については、そこからの年貢の半分が聖なる事業のため教会に与えられるよう取り計らってくれました。

わたしが留まると知った町の人々の喜びや、その喜びを表すために殿や奥方や貴人たちが届けてくれたたくさんの贈り物は、言葉では言い尽くせないほどのものでした。殿はわたしを迎えに来た船を帰らせましたが、その際に大量の狩の獲物と島でとれた大きな魚を司祭にことづけました。そして「どうかイルマン殿をお残し下さい。きっと大きな収穫につながるはずだと予想します。後々そのことをご覧になるでしょう」と手紙を書きました。わたしの方でも現在何が起きているかを司祭⁸に報告した上で、「これ程までにわたしの滞在を望むのですから、もし司祭様の手紙をお書きになり、子息をキリシタンにするよう殿にお勧めになったら、きっとそうするのではないのでしょうか」と書き添えました。もし実現すれば、今後主の助けによってこの地にもたらされるであろう多数のキリシタンのよき導き手となってくれるでしょう。

わたしが島に留まると決心してから数日後、殿は 50 人ばかりの貴人と共に説教を聞くことを所望しました。そこでわたしは、彼らが彼らの神々を崇拜するのをやめ、唯一無二の造物主デウスだけを敬愛することができるよう、「造物主」と「被造物」の違いをはっきり彼らに説き明かすことを日本人修道士に命じました。修道士は彼らが神々とみなしている存在の空疎なことと、創造主の偉大さについて大変巧みに話をしました。

殿はこの上なく喜び、その日から 14 日間連続して島の主だった貴人たちと一緒に説教を聴聞して、何が真実であるかをはっきり理解しました。それでも改宗には至りませんでした。それは「世間は何と言うだろう」という人間的制約によったと思われる。14 日間の説教を終えた後、主は御憐れみによって、25 人の貴人を光で照らしたまいました。一人は島々の奉行、もう一人は家老を勤める 50 歳になる男で、息子ともども改宗しました。この 25 人は即座に入信を決め、殿は入信の許可を与えたのみならず、部下の改宗を喜び、「デウスの教えは公正・完全かつ真実な教えであるから、皆人がこれを受け入れるがよからう」と言いました。殿自身もゆくゆくはキリシタンになる態度さえ見られました。わたしはこのような熱意とすぐにでも入信を希望する様子を見て、まず 15 日間から 20 日間はデウスの偉大さと秘蹟について話を聞かなければならない、これまでの説教は、現在信じている

⁸ コスメ・デ・トレス (ib.,256r)。

教えによっては何人も救われないことを理解させるために行われたに過ぎず、今後本来の説教を聞くこととなるが、まずその前にオラショを習う手筈を整えなければならない、オラショは入信希望者全員が知っていなければならない、そのために日に（彼らの希望しだい）一度か二度わたしの宿所にやって来る必要があると述べました。主の恩寵により、彼らは結局合計 20 日間やって来てオラショを習得し、わたしはその度に救いについての話をしました。これら全てにおいてわたしの意図したところは、彼らがやがて翻弄されるであろう、激しい嵐の全てを耐え忍ぶことができるよう、深い知識を彼らに与えることでした。

このような展開を前に悪魔はできる限りの邪魔立てを試みました。すなわち坊主たちは、「伴天連たちの足を踏み入れるところ、必ず争いがおこり破壊が生じる。都や山口・博多の町がよい例だ。有馬の領地に至っては、伴天連が入ったために危うく滅亡させられるところだった」と言いました。また五島は日本中で一番平和な島々であるにも関わらず、平戸から海賊が来てとある島を襲撃し、多数を殺傷し所持品を奪い 27 人を連れ去りました。島民はこれを見て、殿には知らせずに勝手に徒党を組んで海賊を追跡しましたが、見つけれなかったのが平戸のある地点に上陸して火を放ちました。平戸側では、これを見て、折悪しくかの地にいた五島の殿の使者を殺害しました。その後すかさず坊主たちは「自分たちの予言が当たったと言ひ募りました。このような中、五島の殿がすでにデウスのお話を聞いていたことがわれわれにとって大きな救いでした。追放されずにすんだからです。しかしながらたくさん敵もでき、中でも救いについてまだ話を聞いたことのない有力者の何人かが、この度の敵方の頭目である坊主たちと手を結びました。

現在オラショを習得中の貴人 25 人の熱が冷めるのではないかと心配しましたが、主の御憐れみにより、彼らはデウスとの結びつきをより一層深めました。彼らがカトリックの秘蹟について十分学んだ後に、わたしは婚姻についての説明をしました。3 人も 4 人も妻帯する者がいたからです。洗礼を受ける前に彼らと交渉して、生涯連れ添うべき妻をただ一人だけ持つようにさせました。このように今回の 25 人は今後入信する全ての住民の手本となるのですから、全てのことを十分確かめた上で、可能な限りの厳粛な式をもって受洗させました。同日午後彼らはわたしに食事会を計画してくれ、わたしの宿主の家にさらなる祝いのために集まりました。そして全ての準備が整った後に、地面に膝まずいて感謝を表しました。食後には 1 人 1 人がわたしの所まで来て、この度の受洗について礼の言葉を述べました」。

【訳注 1】 ...e para este jantar chamou todos os honrados, os quaes vestidos de lustrozas sedas servião com muita ordem à mesa.

<松田訳>そして殿はこの食事に貴人たち全員を呼びましたが、彼らは華麗な絹の着物をまとい、秩序整然と宴席で仕えました。

第 71 章

ルイス・デ・アルメイダ修道士の帰還までに五島で生じた他の出来事について

「この度の授洗の後¹、当地より 1 レグア半ほど離れた奥浦²という場所に赴く必要が生じました。その地の指導者が身内の者とともに説教を聞き、またデウスの掟が殿の住む町で受け入れられたのを見て、自分たちもキリシタンとなろうと決めたのです。そこでわたしに使いをよこし「わたしたちは 1 人の例外なく、キリスト様の教えを授かろうと心に決めています。ですからどうかこちらにおいで下さい」と強く訴えました。彼らの好ましい願いを聞き、翌日わたしは大値嘉³を発ちました。奥浦では集落で最もよい建物が宿所としてあてがわれました。また集落には寺があり、年 4 回の祭りの実施が住民たちに課せられていたのですが、彼らはこの寺【訳注 1】を壊す許可を殿から得て、デウス様のための教会を創建したいと言いました。わたしがこれを聞き入れたので、誰もが大いに満足しました。その地では日に 2 回説教を行うこととし、また子どもが大勢いたので、子どもたちにも教義を教えたり、空いた時間を過ごすのによい活動を提供したりするようになりました。

奥浦に着いて何日か経った頃、この地に教会堂を建てる計画があること、そして土地をならすのに人手が要ることを知って、大値嘉のキリシタン 24 人が、様々な道具類をもった人夫 100 人以上を引き連れて馬でやって来ました。そして「ぜひ工事に参加して功德を積みみたい」と言って【訳注 2】、すぐに人夫に命じて教会のための美しい地ごしらえをさせました。そこはちょうど山が海にせり出す奥浦でも最良の土地で、切り立った崖の高さは 2 尋、広さは縦 40 尋・横 15 尋、敷地の中央を 2 筋の流れの速い川が横切って海まで注ぎ込んでいます。教会の地所は涼しげな木々に囲まれ、集落はそのすぐ下方にあり、美しい松林に取り囲まれた気持ちのよい場所でした。そして木が豊富なため誰でも自由に木材を切り出すことができました。

ここに滞在した 20 日ほどの間には、たえずキリシタンからの訪問を受けました。そして日曜日と栄えある洗礼者ヨハネの日⁴に当たる月曜日に、洗礼式を 2 回行い、全員が土地の有力者である 123 人が受洗しましたので、できる限り威儀の整った厳かな式を行いました。その折、土地の領主⁵【訳注 3】から大量の贈り物を贈られましたので、キリシタンはもちろん、何かの理由で今回受洗できなかった異教徒たちも祝いの席に招きました。祝宴に先立ち、まずは教会の正門近く【訳注 4】の小高い場所に、住民からも入港する船からもよく見えるように、美しい十字架を一基、彼らと一緒に建てました。

¹ *Cartas*, 1575, 257r-260v

² Vocura=Oku-ura (Anesaki 94)、本島の北岸にある (*Cartas*, 1575, 257v では Ocura)。

³ Vocuca=Ojika

⁴ 1566 年 6 月 24 日 (*Cartas*, 257v)。

⁵ この箇所 (senhor=「領主」を補った箇所) は *Cartas* 257v でも欠字

ある時殿が息抜きにこの辺を通りかかって、十字架の建ったこの土地をととても好ましく思いました。そして殿自身が所有する今は使われていないいくつかの【訳注 5】美しい家以外に住居を建てないように命じました。その後早々に工事が始められ、木造でしたのでそれらを船で運ばせたところ、あつという間に家が建ちました。キリシタンたちはこれを見て、殿が領内でいかにデウスの教えを慮ってくれるのかを知り、大変な力と勇気を得ました。

当地の異教徒には、生前、来世のために多量の舍利・お守りやお札をお金で買う習慣があります。救いのためにそれらに全財産をつぎ込み、後々キリシタンとなってからそれらを焼いてしまうものが大勢いるのです。

この地に 75 歳になる老女がいて、領主の母親でした。彼女は財産の大半を、来世のためのお札や贖宥状を手に入れるために使い果たしていました。息子 4 人が当地の指導者でしたが、息子たちがキリシタンとなったことは、彼女には耐えられないほど不快なことで、しまいには何を見ても、彼らが自分を改宗させるために仕組んだことだと疑うようになりました。もしそうなれば、これまで舍利やお札を得るためにつぎ込んだすべてを失うことになるでしょう。けれども主の御計らいにより、老女はデウスについて何度か話を聞き、ついには教えが魂に深く刻み込まれてキリシタンとなりました。そして今では彼女が当地でのデウスの教えの守り手となっています。このことは心中彼女のことをひどく怖れていた他のキリシタンをも心より喜ばせました。

受洗後彼女はわたしの所まで来て、この度の改宗について礼を言いました。そして宝物箱をもってきてわたしの前に置くと、その場で中身を広げ始めました。まず初めに漢字がぎっしり書かれた白い着物を出しました。書かれていたのは法華経という書物で、その着物をまとって最後を迎え、埋葬される者は、全き赦しを得ると異教徒が固く信じています。また同じく字の書かれた着物を 2 枚取り出しました。そこにはかつて記された年代記⁶をもとに彼らの神々が描かれていました。次に大変古びた黒い法衣を出しました。それはとある名僧のもので非常に高価なものでした。また一面に字の書かれた手ぬぐいも出しました。最後に大量の偽の教書を出しました。すべて折りたたまれ、死ぬ時には首からさげられるよう紐がついています。わたしは彼女が救いのためにこれまで行ってきたことを目の当たりにして驚きました。老女はこれら全てをわたしに託し、「わたしにはキリシタンとなるために御身に差し出せる財産がもうないのです」と言いました。最後にこれまで祈りのために使っていた数珠もわたしにくれたので、代わりに十字のついたコンタを与えると、とても安心したようでした。

その後わたしは村を去って大値嘉⁷に向かいました。大値嘉では信徒たちからも、受洗を心待ちにする異教徒たちからも慈しみ深く迎えられました。町に到着するとすぐに、今後は日に 2 回、1 回はキリシタンに教義を授けるために、もう 1 回は異教徒のために説教を行

⁶ *Cartas* (258r) でも *coronistas* となっている。 *cronistas* の古い形。

⁷ *Vocçuca*=*Ojika* (*Cartas* 1.c では *Ochiqua*)。

うことを決めました。大値嘉には合計で 25 日間滞在しましたが、その間多数の土地の有力者が入信を決めたので、彼らの希望に沿って授洗していきました。

わたしが定まった住居を持たず、また（余りにも大きいので）殿の所有する建屋にも移りたがらないのを見て、殿⁸はわれわれのために家を建てることを決めました。たちまちとても美しい木材が大量に集められ、どのような建物がよいか図で示すよう求められました。その後多くの大工が呼び集められ、教会の建設が始まりました。このようなよき志を見て、わたしは殿の尽力に心からの感謝の意を伝えました。

教会の建てられたのはその地のほぼ中央にあるよく囲われた場所で、敷地の片側は海に連なり、果実のなる木がたくさん生えていました。そこは以前殿の祖父が住んでいたところだそうです。落成するとすぐに奥浦でも同じように工事が始まりました。

数日後再び奥浦のクリシタンを訪ねましたが、そこで主の思し召しにより、わたしはひどい身体の痛みで襲われ、骨と皮ばかりになりました。というのは痛みで食べることもままならず、おかゆ以外のものを口にすればたちまち吐いてしまうような状態だったからです。この苦しみの中、クリシタンは絶えずわたしのもとを訪れて、他では経験できないと思われるほど、大きな愛情を示してくれました。

痛みが徐々に引き、何とか主への奉仕を再開する気力を取り戻していた頃、わたしの罪深さのゆえに、そして人々に坊主の言葉を信じこませるという目的のために、悪魔の企みが実行されました（坊主らは、五島がデウスの掟を受け入れたゆえに、激しい戦が起こって荒廃するだろうと触れ回っていたのです）。すなわち平戸の殿の義兄弟で、平戸の殿と五島の殿の家臣である男【訳注 6】が、五島の殿に反乱を起こしました。これは悪魔の使いの言葉を人々に信じこませるためでした。

この裏切りを知った五島の殿はひそかに船隊を組織し、裏切者の領内に上陸させて大きな被害を与えたので、男は平戸に逃亡しました。男の追跡に発つ前に殿は、追っ手の中にも裏切り者がいるのを怖れて、部下全員に彼らの神々の名において忠誠を誓わせました。彼らの慣習にのっとりた誓いの立て方はこうです。まず酒が大量に準備され、坊主たちが様々な儀礼とともにこれを神に捧げます。その後坊主たち自身がその酒を殿の前に持って来ます。一方誓いを立てるべき者一全員が高貴の者一は広間に集まり、1人1人が殿から盃を与えられ、盃は酒で満たされます。この酒を飲み干す者はあたかも次のように言うがごとくなのです。「もしわたしが命尽きるまで、殿への忠誠を尽くさなければ、神々すべての怒りがわたしに向けられますように」。

広間には約 50 人のクリシタンがいましたが、その内の 1 人が呼ばれて盃を与えられました。呼ばれた男はこう答えました「この盃にあるのは酒ですから、ただ酒として飲ませていただきます」。男の素っ気ない返事を聞いて、土地の代官ドン・ジョアンが次のように説明しました。「殿、広間にいるクリシタンでこの酒を飲む者はございません。なぜならわれわれの掟では、異教徒の神々にではなく、天地の創造主にたいしてのみ誓うべきだから

⁸ f.279r で彼について述べられている。

です。もし創造主において誓うことをお望み下さるなら、喜んでそうしましょう」。それに対して殿はこう答えました。「なるほど、この者がキリシタンだとは気がつかなかった⁹」。こうしてドン・ジョアンの徳と熱意によりわれわれは誓いを立てることから免れました。この男は五島におけるキリシタンの頭領であり、また屈指の騎馬武者で戦において勇敢であることから、あらゆる者から恐れられています。そして彼の武勇は五島で大変尊敬されています。

船での追跡に発つ前にキリシタンたちはわたしに別れを告げにやって来ました。そして危難から身を守るために、聖遺物や、福音・オラショを書き写した紙を分けてほしいと頼み込みました。わたしは、聖遺物の代わりにクルスの印と、イエス・マリアの尊い御名を身につけ、困難に遭った時は、印を結び御名を唱えるがよいと彼らに伝えました。それを聞くと彼らは胸をなでおろし、わたしの言葉を心から信じて船に向かいました。わたしの方でも彼らへの加護をたえず神に祈りました。

3, 4 日して彼らが戦場から戻りました。主デウスはその限りない御慈悲により、ドン・ジョアンを始めとするキリシタンらが多数の異教徒を殺し、しかも無傷で帰還することを、さらに戦において大きな榮譽を勝ち取ることをお許しになりました。この事実は異教徒たちをひどく狼狽させました。なぜならキリシタン全員が名誉に包まれて帰郷し、1 人の死者も負傷者もでなかったからです。以来信徒たちはイエス・マリアの清らかな御名と、いかなる困難においても十字を切ることを、心から頼むようになりました。彼らがわたしに告げたところによれば、彼らは平戸での下船前にまず膝まずき、コンタについた十字架を頼りに、心からの信心をもって十字を切り、聖なる御名を唱えたのだそうです。そして彼らの生還を島に残ったキリシタンたちが歓喜して迎えたことも、キリシタンが互いにいたわり合うことを見せつけて、異教徒たちを驚かせ、まごつかせたのでした。

平戸の肥州は自らが原因を作った戦の惨憺たる結果を目の前にし（義兄弟に五島の殿の領地を奪うよう、そそのかしたのは肥州でした）、即座に 200 艘の帆船よりなる大規模な艦隊を組織しました。彼らの軍はいきり立って、万全の態勢で向かってくるという情報がわれわれの所までもたらされました。

艦隊が 3 つの島のどれに向かって来るのか分からなかったので、領内は恐れおののき、殿は沿岸の住民全員に砦に入るよう命じました。わたしは当時海沿いのキリシタン集落奥浦にいましたので、そこから高い山に食料を運び、山中深いところに隠さなければなりません。あわせて頂上にわれわれ自身の避難場所も作りました。こうしていよいよ敵軍出陣の知らせが届いた時には、全員が山中への避難を完了しており、兵士を除き誰ひとり残っていませんでした。わたしにとってこの度の避難は大変荷の重いことでした。山道は険しく急で、わたしは骨と皮だけになっていたからです。何とか辿り着いた時には半生半死のていでした。しかも山上には薬になるものや、重い病からの回復を助けてくれるものは、米と塩辛い魚が少々、それに調理して食べる干した蕪の葉が少しだけでした。けれ

⁹ *Cartas*, 259r では<se me acordava>

どもこのように人間的な薬が欠けていたにも関わらず、主はわたしに御憐れみを垂れ給い、わたしは徐々にですが回復していきました。とはいっても、このように事態が変化し、混乱することについて、悲痛な思いを感じずにはられませんでした。主はまたキリシタンにも御恵みを与えられ、これほどひどい逆境の中でも彼らが信仰を失うことがないように導いて下さいました。さらに五島の殿がデウスの教えについて真実を理解してくれていたことが、キリシタンの心を落ち着かせ、われわれの追放を阻止するために大きな助けとなりました。

平戸の艦隊は最初の島に着くとすぐ沿岸のあちこちに火を放ちましたが、辺りを 25 日間ほど荒らしたところで引き揚げが命じられました。新たな敵が彼らの領内に大きな被害をもたらしていたからです。敵が引き揚げるとすぐに、五島の殿は、100 艘よりなる船隊を仕立てさせ、平戸領内の一つの島の掠奪を命じました。人々は命令通りその島を掠奪し、目に入るものに火を放ち住民を殺し、100 艘近い小舟を分捕ってようやく満足しました。

わたしの病気について伝え聞いたコスメ・デ・トレス司祭は、わたしに帰還を命じ、さらに日本人修道士¹⁰については島に残るように（これはキリシタンを慰撫するためです）と指示しました。このことを知った殿とキリシタンは何とかわたしを引き留めようと努力しましたが、「わたしか、さもなければ他の司祭がきっと戻って参ります」と言う（コスメ司祭がそう言うように命じたので）、ようやく納得しました。出立の際には殿とキリシタン全員が 1 レグア以上も見送りに来て、道中必要なものまで持たせてくれました。彼らに別れを告げて船に乗り込みましたが、途中大時化に悩まされ、また海賊に襲われるのではないかという少なからぬ不安にも襲われました。何とか福田まで着くと、ガスパー・ヴィレラ神父のもとに 4 日間留まり、その後口之津に向かい、そこで完全に健康を回復するまで約 20 日間コスメ・デ・トレス神父と過ごしました。

この頃島原には既に 1300 人のキリシタンがいましたが、彼らは坊主から絶えざる迫害を受けていたので、称賛されべき事例には事欠きませんでした。この度も異教徒の祭り¹¹への手伝いと参加がしつこく要請されたのですが、彼らはデウスの教えに反するため行かないことに決めました。このことが坊主や殿の母親・親戚たちを始めとする異教徒すべての神経を逆なでし、彼らは「デウスの掟は有害である」とこぞって殿に訴えました。さらに「このような度重なる行き違いには我慢がならないから、領内からキリシタンを一掃してほしい」とも訴えました。

自身も悪魔の使いである殿は、「今後領内にキリシタンは一切認めない」と言い、教えを棄てた証拠にコンタを差し出すよう信徒たちに命じました。

重立ったキリシタンが集まって話し合った結果、教えを棄てる位なら 1 人残らず死を選ぶ方がよいと結論し、コンタは渡さないことに決め、「われわれは殿の許しのもとキリシタ

¹⁰ ローレンソ。

¹¹ *Cartas 260v* には <como...día del Corpus（聖体の祝日のような）>とあり、祇園祭りのこと（cf. c.46）。

ンとなったのですから、もしキリシタンであるがために死をお命じになるのなら、甘んじて受けます。」と伝えました。殿は彼らが言いつけに従わないことにカッとなり、「すぐにコンタを差し出せ。さもなければ痛い目にあわせる」と伝えさせましたが、それに対してもしキリシタンは前回と同じように、「命を失う覚悟はできています」とのみ答えました。殿はなおも土地の代官を通じて何度も命令を伝えて脅し、その度にキリシタンは初めと同じ返答を返しました。

殿命も脅しも役に立たないのを見て、殿は懐柔策を取ることにしました。そこで自身の母親と坊主たち、それにキリシタンの親戚で未改宗の者（彼らの言うことは驚くほど信徒たちにとって説得力がありました）等に、頼み込む・機嫌をとる等ありとあらゆる手を使って、キリシタンを説き伏せ転向させるように命じました。けれども彼らの信念は堅固で、主キリストに盤石の基盤¹²があったため、かえって説得者に理路整然と反論したので、ついには棄教について彼らと話そうとする者はいなくなりました。そこでようやく殿も、彼らの心を変えさせ、教えとコンタを棄てさせるのは不可能だと理解し、自身が大きな痛手を被ることなくこれほど大勢の部下を殺すことはできないと考えて、ついには迫害をあきらめ、キリシタンは勝利を得ました。

この争いは15日間続きましたが、後になってキリシタンが語ったところによれば、彼らは1時間ごとに死を念じ、恐怖から食べることも眠ることもままならなかったそうです。唯一の慰めはデウスを頼み、またコスメ・デ・トレス司祭からの手紙を何度も読み返して自身を鼓舞することだけでした。それらの手紙は、彼らを勇気づけ、信仰と使命を忘れさせないために書かれたものでした。彼らの中でも指導的立場にあった者たちは、嵐が過ぎ去った後に口之津を訪れ、司祭の足元に身を投げ出して「わたしたちは救い主イエス様にご奉仕し、わたしたち自身の信仰を表すために、命を捧げることができませんでした。もうキリシタンと呼ばれる資格はありません」と言って激しく泣きました。司祭は彼らを抱きしめて喜びに涙し、改宗して3年でこれほど固い信仰が育っていることを、主において全員が喜びあいました¹³。

【訳注1】 pagode

<松田訳> 仏像

【訳注2】 E disserão que vinhão buscar algum merecimento na obra que faziamos

<松田訳> 脱落

【訳注3】 Wicki氏によれば写本に欠落がある。

<松田訳> 「村（人たち）」

¹² Cf. コリントの信徒への手紙一 10 - 4 (*Cartas*, 260v)。

¹³ *Cartas* 1575, 260v. *havendo* から *christãos* まで (=「改宗して3年でこれほど固い信仰が育っていることを」) は脱落。

【訳注 4】 ...que fica detraz da porta principal da igreja

<松田訳>教会の背後。

【訳注 5】 ...senão humas suas mui fermozas...

<松田訳>一軒の

【訳注 6】 ...um cunhado do tono de Firando e vassalo deste como do Goto

<松田訳>「平戸の殿の義兄弟で、五島の殿の家臣である人物」

第 72 章

ルイス・デ・アルメイダ修道士がどのように志岐島¹・天草島²での 改宗事業に着手したかについて

口之津の向かい、ちょうど湾をはさんだ反対側に、大きな陸地があり、まるで肥後から突き出した岬のようだった。そこは 5 人の殿³が分割して治めており、その中の 1 人を地名からとって志岐殿と言った。志岐殿の領地は縦・レグア横・レグア【訳注 1】。殿の領地は口之津から至近距離にあり、また殿は有馬の大名仙巖^{せんがん}の息子を養子としていたので、コスメ・デ・トレス司祭は、この志岐殿と家臣団に聖なる福音をもたらすのがよいと考えた。また殿からも人づてに何度か宣教依頼があった。そこで司祭は、アルメイダ修道士が五島から帰って 20 日ほどたった頃に、彼にもう一人の修道士⁴を伴わせて、新たな使命のため志岐へ向かわせた。到着すると、殿をはじめ土地の者たちから懇ろに迎えられ、「デウス様の教えについて何なりとお聞かせ下さい。どうかすぐにでも説教を」と求められた。そしてすぐ配下の者が呼び集められ、広間が聴衆でいっぱいになると、全員が熱心に説教を聞いた。

豊後での経緯から、デウスの教えを新しい土地で、まず庶民の間に広めるのがどれほど厄介であるか、経験上分かっていたので、まず殿をキリシタンとはできないかとアルメイダ修道士は画策した。志岐殿の方でも、初回の説教を聞くと、聖なる教えの正しさを褒めそやし、是非聞いてみるよう部下たちを促した。そして修道士との会話の中で次のように言った。「ぜひ洗礼を授けていただきたいが、どうか御内密に願いたい。邪宗を受け入れたと言って部下たちが蜂起しないか—ちょうど先般ドン・バルトロメウが痛い目にあったように一甚だ心配なのだ。無論そうなればあなた方にとっても益とはならないだろう。しかし晴れて部下たちが入信したあかつきには、改宗を明るみにし、全員が説教を聞いてすばらしい教えを受け入れるよう布告も出そう」。けれども修道士は殿の心根を見定めるために、もっとよく性質を吟味し人柄を探った。その結果分かったのは、殿は^{よわい} 60 を過ぎた老将で、財力に恵まれ行動的、武勇にすぐれ、下地方の隅々から怖れられている。可能なら強盗もためらわず、偽善的でいかさまや策略に長け、真理には興味がなく、心から悪魔に奉仕するその忠実な僕だということだった。ちょうどその頃ポルトガル船が一艘領内の港に来合わせたことがあった。殿は持ち前の貪欲さから、もし自分がキリシタンとなれば、司祭やポルトガル人たちに恩を売って、毎度自領に船を呼び寄せることができるだろうと考

1 天草島の北西にある砦。

2 九州の西南にある諸島。フロイスは本章の始めの部分を、アルメイダ修道士の志岐発信書簡（1566年10月：Cartas 1575, 260v-261r）によっている。

3 天草、志岐、栖本、上津浦、大矢野。Cf. SHUTTE, *Introductio* 876.

4 日本人修道士（Cartas 1575, 260v）

え、そこから得られる利益が莫大であることを計算して、教えを理解している風をしたりしつこく授洗を頼んだりしたのだった。そこで修道士は、殿の動機が内面から発した真のものであることが分かるまで授洗を引き延ばした。そしてある時部下にこっそり意見を訊ねたところ、「殿はキリシタンになって、デウス様の教えについて正しく説き実践することのほか、望んでいच्छやらないように思われます。ぜひ洗礼をお授けになって下さい。そうすれば既に入信した者たちも安心できましようし、異教徒も今より気兼ねなく入信できるでしょう」と答えるまでになった。

修道士はその後も殿への入門教育を続け、洗礼を受けるのに十分だろうと思われるまでよく教えを説いた後に、授洗してドン・ジョアンという名を与えた。同時に殿の兄弟、甥たちをはじめ、身分の高い者から低い者まで総勢約 500 人が洗礼を受けた。

殿は数カ月間は悪意を胸の内に納めていたけれど、なにぶん強力な悪意だったので【訳注 2】、ある日を境に噴出した。噂によれば、殿は心から悪魔を崇拜し、夜毎に交信していたという—それほど身に染みついた習慣だったのだ。しばらくすると信心から阿弥陀堂の建立を始め、キリシタンにも工事に携わることを求めた。ところで当地のキリシタンは、^{しも}下地方の中でもとりわけ実直で信心深く、ちょうどデウスの言葉がよき土地に蒔かれたかのように⁵純粹無垢で、救いを求める気持ちにも慣れ親しんでいた。そのため彼らは殿に、「御殿様、デウス様の教えは、キリシタンがこのような偶像崇拜に関わることをお許しではありません」と度々訴え、また「どうか御許しと御承認を得て従った教えのもとで、心静かに生きることをわれわれにお許し下さい」と誠心誠意頼んだ。さらに「望んでおられる寺の建立につきましては、なにとぞ仏教徒の部下をお使いになって下さい。キリシタンに割り当てられた役については、わたしどもの禄から徴収なさることでご勘弁ください」とも頼んだ。魂を惨めに失って収入が残されるよりも、寺の建立には関わらずに、収入を失う方を望んだのである。

殿は彼らの筋の通った主張を理解せず、脅しつけてでも言うことを聞かせようとしたので、キリシタンの中でもとりわけ堅固な信仰をもち、デウスを怖れる者たちは、自らの故郷・封禄・一族や友人・家屋・その他持ち運べないものすべてを後に残し、折を見てこっそり対岸に避難した。その中にガスパーという者がいて、他の者たちより臆せず殿と話げできた。殿はガスパーや他の者たちに戻って来るよう圧力をかけた【訳注 3】が、このよき男、そして真のキリシタンであるガスパーは、「このような説得は無益ですからどうかおやめ下さい。例えこの身をばらばらにされても引き返すことはありません。まして工事に携わることは」と他の者たちとわが身のために理路整然と訴えた。しかし根っから残忍な気性の殿は激怒し、すぐさま男を殺すよう命じた。ところがガスパーはそのよき人柄のためにキリシタンからも異教徒からも慕われていたので、殺害のため定められた日はすぐ伝えられた。彼は息子ディオゴと一緒に、夜間にこっそり船に乗りこんで、キリシタンの地で

⁵ Cf. マタイ 13 章 23 節。

ある長崎に向かった。そこで司祭と教会の庇護のもと自らの望むように生きようとしたのだった。

まんまと逃げられたことを知った殿は、他にもガスパーを真似、土地を棄てる者ができることを恐れて、より一層苛立ちを強めた。そしてよもや逃がすまいという決意のもと、様々な策をめぐらして2人が長崎にいることを突き止めると、誓いを果たすため刺客を送った。その夜、哀れなガスパーとディオゴは、集落からやや離れた粗末な小屋で眠っていたが、死刑執行人は計画通りそこに押し入り、2人を刀で突きまわして殺した。親子は自らの信仰を表しつつ栄光の道を行った。

折々であるが志岐殿が正気を取り戻すこともあった。そういう時は領内の者がキリシタンとなって教会を建てたり、司祭や修道士から教えを施されることについて、とりたてて嫌悪を感じないようだった。そこでコスメ・デ・トレス司祭は、ミゲル・ヴァス修道士⁶もかの地に派遣して、一定期間滞在させることにした。さらに都から戻ったガスパル・ヴィレラ司祭も志岐を訪れた。島の住民はよき指導を受けていることに加え、既に言ったように根が非常に素直であったので、司祭達は彼らをよく導いて信仰の内に守った。

以前に志岐殿の養子について触れたが、志岐殿はこの養子⁷が改宗することをかたくなに拒んだ。それどころか、それから17年経った後のことだが、この養子を殺して、ガスパルという甥に家督を相続させようとした。ガスパルはキリシタンでとてもよい男だった。しかしこのことは事前に露見し、志岐殿の養子はすでに出水⁸の館の娘と結婚していたので、老人はこれまで腹黒いやり方で手に入れた財産を彼に残さないために、自らの城に火をつける決意した。そして実際に火を放ちすべての財産を燃やした上で、殿自身は天草に逃げた。その後彼らは一旦和解したが、殿が養子殺害計画を再び実行しようとしたので、薩摩の国主が志岐殿を肥後に完全に追放した。肥後では捕虜のような扱いを受け、まだ残っていた1000クルザード以上の銀が没収された。そしてこの不幸で惨めな老人は、6、7年の追放生活を送った後、ついに不誠実で背教に満ちた哀れで不運な人生を終えた。

志岐のキリシタンは常に正しく行動していた。彼らはいくつかの教会を建てそこに祈りのために集まった。家督を継いだ新しい殿は、終始キリシタンに反感をもっていたが、彼らに奉仕されながら同時に彼らを迫害することはできなかったのも、厳しい取り締まりはなされなかった。

1568年ガスパル・ヴィレラ司祭が短い滞在のため志岐に向かった。司祭は献身的な態度で、常に熱心に説教を行なったので、異教徒たちも心を動かされて説教を聞いた。そしてデウスのことを理解した後に新たに600人が洗礼を受けた。

⁶ 彼については第47章参照。

⁷ 六郎 (Rokurô) 諸経といった。1589年から1590年にかけてドン・プロタジオを頼って逃走し、そこで洗礼を願った。(SCHUTTE, *Introductio* 529-532)

⁸ 薩摩の北西部と国境をなす。Cf. 第81章

【訳注 1】 この 1 文は、松田訳にはなし。

【訳注 2】 *..., como aquillo era violento, ...*

<松田訳> 「だが彼はそれを故意に抑えていたに過ぎなかったから、…」

【訳注 3】 *...ao qual o tono apertava e a outros muitos que tornassem atraz,...*

<松田訳> 「彼にも他の大勢の人たちと同様に棄教を迫った」

第 73 章

本年 1566 年に大村¹と平戸で起こった出来事について

ドン・バルトロメウからガスパー・ヴィレラ司祭に、「わが妻と娘が戦のために改宗できないでいる。どうか大村までご足労いただきたい」という要請があった。だが司祭が出立を準備していると、またもや騒動や蜂起が起こり、純忠は重要な砦の一つを失うこととなった。^{そのぎ}彼杵²にある山城で、そこを奪われれば後がないというほどの要害だった。

それほどまで大事な城を攻め落とされるという窮地に立ち、純忠は奪回するか、さもなければ死ぬしかないと決意した。そこである暴風雨の晩、すでに僅かな部下しか残されていなかったが（砦内や集落の者は残らず彼にそむいていた）、その中から 2、30 人を選んで城を襲撃することに決め、残りの者には翌朝合流するよう命じた。日没後出発し、山裾にある彼杵の集落を腹心の部下とともに通過したが、主の御計らいにより誰にも気がつかれなかった。そのまま高く険しい山を登って城に辿り着いた。雨の降る暗い晩で、城中でも麓の集落でも見張りが手薄だった。バルトロメウは部下と一緒に、ちょうどヨーロッパで戦の初めに聖ヤコブの名前を叫ぶように³、名乗りを上げながらよじ登り押し入った。その声に城中の者が散り散りとなって逃げ出したところ、大勢を殺した。逃げおおせた者はすぐ集落内に触れ回り、敵方全員が退却を始めたが、明け方になって、後方に控えていた味方も合流し、山中や道中で見つけ次第、敵を殺したり捕まえたりした。これよって敵方は戦意を失い、味方はいよいよ氣勢をあげた。しかし敵方は戦うより他に逃れる方法はないと腹を決め、このことが福田に停泊していたナウ船のポルトガル人にも知れた。彼らの多くは大村側に加勢を申し出たり、銃を貸したりするために交戦地に向かったので、これを見た敵軍は、ポルトガル人と事をかまえることを怖れて、再び退却した。

ドン・バルトロメウの部下の貴人数人が、司祭と面会しようと福田港を訪れた。そして次のように言った。「デウス様の掟は尊いものでございます。また何よりもわが^{あるじ}主の君が改宗してこの掟に従っているのに、われわれが異教徒にとどまっているのは、道理に合わないことに存じます」。こうして彼らの内の 4、5 人と、仕官してまだ日も浅い少年たちが改宗した。少年たちに入信の指示を出したのはバルトロメウ自身だった。この者たちの中に 1 人異教徒の中国人がいた。彼は息子を連れて来ていたが、それは受洗させて主人に差し出すためだった。この中国人はとてもよい男で、当時、他の家臣はみな主人に反旗を翻し、あわよくば殺害しようと付け狙っていたのに、彼は、^{あるじ}主がキリシタンであるために憎まれていることを知りながら、決して密告しようとしなかった一もし居所を告げていたなら、大きな見返りが得られていただろうが。それどころか主人が身を潜めていた間、こっ

¹ *Cartas 1575*, 264-v (1566 年 12 月 15 日ジョアン・カブラル発信)

² 肥前国彼杵（ソノギ）、沿岸部にある（ANESAKI 97）。

³ 合戦の雄たけび、SEBASTIÃO GONÇALVES, *Hist. I* 177-178, 282 参照。

そり食べ物を届けたので、ドン・バルトロメウはそのことに恩義を感じて息子を引き受けたのだった。中国人は非常に喜んで息子を託し、自身は異教徒のままだったが、息子をキリシタンとしたことに心から満足した。

ドン・バルトロメウと同時期にキリシタンとなった殿がもう一人いた。この殿も、うち続く戦火のため家中を改宗させられないでいたが、ようやくふさわしい時が到来したので、一族家臣を入信させるために説教者をよこしてほしいと再三司祭に依頼した。そこでコスメ・デ・トレス司祭は、当時まだ会員とは認められていなかった養方パウロを派遣することにした。屋敷に着くと、養方パウロは大きな歓待を受け、救済の話聞くために家中の者が早速集まった。だが靈魂に関わることでこのような大きな成果が上がっているのを見て、悪魔が妨害を試み、そのための道具として近隣に住むドン・バルトロメウの敵を用いた。この男は領内の者が説教に心を奪われているのを見て、その隙に攻撃して彼を破滅させようとした。この試みは主の御慈悲によって事前に知らされたが、このような内乱と予期しない混乱のために、せつかくの説教は中断され、彼らは合戦に駆けつけなければならなかった。

平戸⁴

平戸の肥州は抜け目のない偽善者だったので、教会の人間が何度か訪れた時には、穏便で丁寧な言葉を使っていたが、振舞いからおのずと、聖なる信仰の敵であることが明かされていた。もし自身の身の安全が確保されるなら、とつくに教会を破壊してキリシタン宗団の発展を阻止していたことだろう。このことは肥州だけでなく、彼の妻や息子たち、そして異教徒の重臣2人にも当てはまった(われわれはそのことを既述の一件⁵からよく理解していた)。というのはある時キリシタンの船が一艘、物資補給のため福田から平戸に向かっている、肥州の船隊と遭遇した。肥州は他の船には自由に航行させたが、^{くだん}件の船については、彼の部下であるキリシタンのもので、教会の物資が積まれていると勘づいて攻撃をしかけ、あげく乗組員の武器から教会の物資まで、積荷のすべてを奪い去った。その中に聖母被昇天の像もあったので、かの地におけるデウスの教えの主たる仇敵である加藤殿という男がこの像を奪い去った。加藤殿はドン・アントニオ⁶と同程度の実力をもった領主である。加藤殿はこの像を分捕ると、持ち帰って筆で目を塗りつぶしたり、その他幾多の愚かな細工を加えたりしてから、屋敷を訪れる者たちに見せて嘲った。ある日一人の知り合いを呼びつけて像を見せたが、彼はキリシタンだったので、このようなひどい所為に心からの悲しみと怒りを覚えた。けれども力では相手にかなわなかったので、ひたすら自分を押し殺し、「デウス様の御母上で、清らかな聖処女でもあられる方の御像を、このように傷

⁴ *Cartas* 1575, 265r-269v (J. Fernández 1566年9月15日平戸発信)

⁵ 第63章

⁶ 籠手田

つけられ恥辱を与えられるとは、大変な罪を犯されました。」とだけ言った。そして胸中非常な痛みを感じながら、膝まづいて祈りを捧げると、その後こっそり司祭に告げに行った。教会ではたちどころに加藤殿の所業や、その他の者による嘲りや悪行について知れ渡ったが、それらはすべて肥州と跡取り息子⁷の了解のもとで行われたものだった。

司祭はさらなる^{いさか}諍を避けるために、数日間はこのことをドン・アントニオに告げず、素知らぬ態度を守った。だがどのみち知れることなので、ことの重大さがよく伝わるよう厳しい言葉で告げ知らせた。

ドン・アントニオと弟のドン・ジョアンは、事件について聞くと、深く悲しんで憤り、「かくの如きことには我慢がなりません。デウス様の御母に加えられた恥辱を、死してそそぎましょう」と言った。それにたいして司祭は「そのような気持ちは清く正しいものですが、現段階で実行するのは適切なことではありません。もしこの度の不名誉に報復したいという気持ちのままに行動すれば、肥州と異教徒はあなた方を叛逆者とみなしましょうし、平戸の異教徒はキリシタンの4倍はあるので、あなた方御二人と教団の両方を壊滅させることができます。そうなればただ御二人の身体だけでなく、当地の霊的な財産までが失われましょう。しばらくは見て見ぬふりをしてやり過ぎなさい。」と行った。こうして彼らは司祭の助言に従わざるをえなかった。

ちょうどその頃、ドン・アントニオの下僕でキリシタンである男が、平戸の町で1人の異教徒とすれ違った。キリシタンは船が肥州の船団に襲われた時、福田から司祭のもとに向かうその補給船に乗っていた男で、異教徒は船中で彼の刀を奪った男だった。男を見るとすぐさまキリシタンは飛びかかり、腰に差していた刀を奪い取った。気位の高い日本人にとってこのような行為は大変な恥辱である。その上異教徒は、襲撃船の船長である加藤殿の兄弟の従者であり、キリシタンは加藤殿の宿敵ドン・アントニオの家来だったので、加藤殿はこの件を名誉にかかわることとし、すぐさま肥州の嫡男^{しげのぶ}鎮信と結束して、村々にいた仲間たちを内密に集めさせた。そして彼らに教会に攻め込むことと、ドン・アントニオを破滅させることを命じたが、そのことを異教徒の一人が身内のキリシタンに通じた。

翌日夜半過ぎに教会が襲撃され司祭と修道士たちが襲われることを知らされて、司祭とドン・アントニオ、ドン・ジョアンの兄弟もすぐ会員に参集を命じた。そして神聖なる閣下のご意志に従う心の準備をしながら皆で祈った。司祭は彼らに⁸「敵が宗団を破壊し、教会を蹂躪しようとするのは、デウスの教えへの憎悪に駆られてのことに他ならない。したがってわれわれは心安らかに、喜びをもって死を受け入れなければならない」と説いた。

司祭はまた住民の中でリーダー格にあるキリシタン3・4人も呼び出して、何が起きているか内密に知らせた。彼らは仲間にならぬことを伝達し、夕刻には60名近いキリシタンが、家も妻子をも危険にさらし、教会を防御するためなら命を投げ出す覚悟で、武装して集まってきた。四囲は異様な騒がしさで、「気をつけろ」という声がかつて聞かれた。また財

⁷ 鎮信（シゲノブ）、この先にも出てくる。

⁸ 校訂者注参照。

産を火の手から守るために、蔵⁹にしまいこんでいる者たちもいた。というのも、平戸では戦があると必ず木造の家々に火がまわり、厚く頑丈な蔵に収めたものしか火の手を免れえないからである。

暗くなってから度島^{たくしま}や生月、それにドン・ジョアン領内の全ての住民がやってきた。そのため教会が騒がしくなり過ぎないように、近隣のドン・アントニオの屋敷に一旦待機させ、敵の来襲があった時には側面からも迎え撃てるようにした。

こうして諸聖人の祝日の前夜、われわれとキリシタンは一晩中寄せ手が来るのを待った。けれども肥州と加藤殿は、キリシタンたちにどれだけ自衛の覚悟ができているかを見てとって、軍勢を村々に帰し、取りかかったことを断念した。それから6日後、肥州は異教徒の刀を奪ったあのキリシタンの件を不問に処した【訳注1】。その5日後に司祭は度島^{たくしま}に渡り、ミサや説教をおこなって住民を落ち着かせた。

それからさらに3日後、集落近郊のキリシタン墓地の十字架が引き抜かれていることが話題になり、教会に大きな悲しみをもたらした。なぜならこのようなことは肥州の息子の鎮信^{しげのぶ}か、加藤殿が行かせたに違いないからである。度島^{たくしま}にいた司祭はすぐ男¹⁰を1人平戸に送り、十字架がそこにあるかどうかを確かめさせ、もしなければドン・アントニオに処置を問うよう¹¹命じた。青年は言われた通りそこに向かい、十字架がなかったのでドン・アントニオに相談したところ、「早急に弟ドン・ジョアンと話し合しましょう。討議の結果は、使者をやってすぐ度島の司祭様にお知らせする」との答えを得た。青年が帰途につき、再び墓地のところを通ったところ、十字架が初めあった場所と寸分たがわない所に、破損もせず破壊もされずに建っているのを見た。このようなことは肥州や異教徒の重臣の指示なく行われたとは考え難いので、彼らは本心では教会の敵であるにしても、表向きには友好関係を保ちたがっているのだと理解して、われわれは喜んだ。

平戸のキリシタンはもう4年間も告解をしていなかった。彼らの聴罪司祭であるコスメ・デ・トレス司祭は有馬に駐在していたが、平戸と有馬は敵対していたので、訪ねて来ることができなかったのである。その上入信以来何年も告解をしたことがない者たちもいた。彼らが告解を必要としていること、そしてそれを心より望んでいることを、平戸在住の司祭¹²が認め、できる限りの努力をして日本語を習得し、降誕祭の一カ月前より告解を聞き始めた。今や聴罪司祭が2人いると知ったキリシタンの喜びは大変なものだった。教会堂は朝から晩まで人であふれ、彼らは8日間の準備をした後10日ないし15日間、自分の番がまわって来るのをひたすら待った。司祭は日なが、夜も2時間は男性の告解を聞き、住民たちは涙ぐんで情熱的に聖体を拝領した。

司祭が告解を聞いていると知って近在の島や村々のキリシタンも平戸にやって来た。そ

⁹ 倉庫・食料庫

¹⁰ *Cartas* 266v: 「クリスチアーノという中国人青年」。

¹¹ *Cartas* 267v: 「ヤコメ・ゴンサルベス修道士に意見を聞くよう…」。

¹² バルタサル・ダ・コスタ (ib.)。

して「どうか船も用意したので、わたしたちの村まで来てほしい」と涙ながらに訴えた。告解を待ちわびていた平戸の住民は、これを聞いて非常に悲しんだが、司祭は彼らをよく慰め、四旬節には必ず戻ってこようと約束した。出立の際、男女の住民が、見送りのため半レグア程付き添って行くのを、坊主や異教徒が高いところから見ていて、キリシタンが司祭に示す慈しみと敬愛の深さに非常に驚いた。

生月^{いきつき}でも平戸のキリシタンに劣らない熱心さで住民が告解の準備をした。日中ジョアン・フェルナンデス修道士が、告解と聖体拝領の秘蹟について説き、司祭が日なが、また夜間と早朝の一部にも告解を聞いた。

ミゲルという名の敬うべき老人がいた。生月の教会で長年管理人を務めたが、司祭が来る一カ月前から病により死の淵をさまよい、もはや回復の望みがなかった。到着した頃には死は時間の問題だった。老人は司祭に迷惑をかけたくなかったので、自身を教会まで運んで行くよう周囲に頼み、告解をして聖体拝領を受けたあくる日、主が御そばへお召しになった。いまわの際、キリシタンがデウスのお話をしに行くと、「わしの魂は主において満ち足り、喜びにあふれて参る。なぜかと言うに、主の尊い御身体の一部をいただいたからじゃ。必ずや永遠の至福を得られることじゃろう」と答えた。そして妻子や孫たちにできるだけ早く告解することと、デウスを恐れ、その尊い教えを守ることを勧め、イエスの名前を口ずさみながら息をひきとった。

司祭は生月から 堺目^{さかいめ}¹³に行き、そこからまた 壺部^{いちぶ}¹⁴に行ったが、そこでも人々が連日大挙して押しかけて来た。壺部で司祭は、他の住民に交じって、1人の坊主の告解を聞いた。パウロという 30 がらみの男で、かつては土地でもっとも偉い坊主の弟子だった。当時会堂はまだ偶像崇拜の寺で、パウロは悪魔の使いとして働き、悪習や罪に染まっていた。けれども司祭が訪れた時には、建物はすでにサンタ・クルス教会となっており、パウロは、かつて罪を犯すようそそのかした同じ住民に、神であり救い主であるイエスキリストをお慕いしお仕え申し上げるよう、言葉やよき手本によって鼓舞していた。

そこから 根獅子^{ねしじ}¹⁵の港に向かった。住民は老いも若きも残らず歓喜して、司祭と修道士を浜で迎えた。上陸するとみなで行列を作り、両手を差し上げ【訳注 2】、高らかに教理問答を歌ったり、創造主をたたえたりしながら、教会まで歩いた。それはとても素朴で胸を打つ光景だった。彼らはそこにも 5, 6 日間留まり、説教をして告解を聞いたり、その他の秘蹟をおこなったりした。

この島の岬の方の村々の領主で、その中の 1 つに居を構える貴人がいた。彼は 14 年前平戸で 10 人ばかりの従者とともに入信したのだが、悪魔にたぶらかされ、主人も従者も、もはやキリシタンとしての生活を送っていなかった。ただ一人彼らの中でもっとも見下され

13 ドン・アントニオの領地 (ib. 267v) 「堺目」(ANESAKI 96)。

14 「ドン・ジョアンの村」(*Cartas* 1.c.) ; 「壺部」(ANESAKI 87)。

15 「もう一つのドン・ジョアンの村」(*Cartas* 268r) ; ANESAKI の説明と矛盾がある (ネシコ : 「この平戸から 5 レグアのところに根獅子という場所がある」)。(*Cartas* 1598, 246v)。

ていた男だけが、その後司祭に会わず説法を聞くこともなかったのに、13年間信仰を固く守り続けていた。男は平戸に司祭が常駐し、教会もできていることを伝え聞くと、嫁と孫を受洗させようとやって来た。「もう何年も前からわたくしはキリシタンでございます」との言葉に、ジョアン・フェルナンデス修道士が、教えについての理解のほどを尋ねると、男は次のように答えた。「わたくしが存じていることは、この天地には御作り主様がいらっしゃることに、わたくしの命も、御作り主様から授かったということです。またこの御方だけが後生をたすけることができ、御助かりとグロウリアがあること、生きている間に教えを守った者には、御作り主様が永遠の喜びを賜うということです。また地獄があり、教えを守らなかった者は、そこで未来永劫の苦しみにあうということです」。さらにデウスが造った最初の人間であるアダムとイブの名や、イエスとマリアの名を覚えていると言い、これらの名前を絶えずつぶやいていた。祈りは知ってるかと問うと、「パアテルノステル、アヴェマリアと告白の祈りを知っています」と答えて、やにわにしゃくりあげ泣き崩れたので、そばにいた者たちは驚いただけでなく、非常に敬虔な気持ちになった。男はジョルジと言って、屋敷では皆から軽んじられていたが、主デウスが彼に賜った信心と情けにより、屋敷の主人や仲間が偶像崇拜を離れ創造主の掟に従うよう、常に働きかけ、また祈っていた。われわれの主はこのジョルジを用いて終に屋敷の当主の心を動かし給うた。すなわち当主は、司祭がジョアン・フェルナンデス修道士と一緒に獅子に滞在していた時に、高貴な家の出である奥方と一緒に、奥方やその侍女を入信させようと獅子にやって来た。そして自身も聖なる教えについて一から詳しく聴聞した。その結果奥方と侍女はキリシタンとなり、主人もこれまでの生活を深く悔い改め、今後平戸の肥州や異教徒にたいして、自らの身をもって信仰を示すことを誓った。さらに告解の秘蹟を受けることも所望したが、「そのためにはまず必要なことを学び、何日か準備をしましょう。それが済めば平戸で告解を聞きます」と司祭は言った。そこでまず奥方と一緒に婚姻の秘蹟を受け、四旬節の半ばに平戸まで行って、それまでの全人生について告解した。それから聖木曜日【訳注2】に聖体拝領を受け、他のキリシタンたちと一緒に鞭打ちの苦行もした。従僕のジョルジについては、これまで蔑んできたが、その後は兄弟とみなしそのように遇した。彼は自分が告解をした後、ジョルジにもそれを勧め、そのジョルジの告解に司祭は深い感銘と感化を受けた。なぜなら司祭の言葉によれば、彼は野卑で愚か¹⁶な男だったが、自らの生涯についてよく理解し、実に誠実に告白したからである。その様子はまるで8日間ごとに告解する聖職者のようだったそうだ。

以前に述べたように、ドン・ジョアンの年老いた義母は、孫娘である世継ぎの子を入信させた¹⁷だけでなく、家中の全員にも教義を聞いて、理解できた者は入信するよう申しつけた。だが根獅子の集落内で指導的な役割を果たしていた1人の若者だけは例外とし、ディオゴという土地の代官にも、彼の入信を認めないよう命じた。ところがディオゴは、他

¹⁶ 無学であること。

¹⁷ Cf. 第63章。

の者と一緒に説教を聞き、ぜひとも洗礼を受けたいと言った。司祭は、せっかく家中がこぞって改宗している時に、当主の姑の機嫌をそこねて新たな^{わざわい}禍の種を作らないように、その場は適当にごまかし、後から洗礼を授けてマテウスという名を与えた。老女は異教徒だったので、亡き夫の葬いを終わらせるため、平戸から 100 レグア離れたある有名な日本の寺¹⁸に亡夫の像を建立することを希望していた。そしてその仕事のためこのマテウスを遣わすことにした。

よきキリシタンであるマテウスの父親は、命令を知って司祭にこっそり告げに行った。そして「息子を偶像のために行かせるのは、せっかく選んだ天国への道から遠ざけること、何としても認めがたい。そのような指図に従うぐらいなら、わたくしも息子も、天国での財産を失わないために、ここ根獅子に所有している家屋と土地を放棄して、他の土地に参りましょう」と言った。親子は洗礼を受けてからまだ 1 年にも満たなかったが、このような態度を見てわれわれ会の者も大変勇気づけられた。

召使いであるマテウスが命令に従わず、しかもその理由がキリシタンになったからだと聞いて、老女は激怒した。最前から入信を禁じていたのだからなおのことである。すぐ代官のディオゴに、「言いつけにそむいてキリシタンとなったのだから、マテウスを処刑しろ」と命じた。この時ディオゴがとった行動は模範的であった。彼はデウスの御心に逆らわないうために、自身の封祿と役をすべてあきらめることに決め、ただこの青年を殺さなかっただけでなく、ことの次第をすぐ本人に伝えた。そこでマテウスと父親は土地を棄て、飯良^{いらい}というドン・アントニオの領地に向かった。そこで貧しくはあったが御心にかなう一生を送った。

ディオゴは今後主人が、マテウスに対する怒りを自分に向けるに違いないと確信して、すぐ平戸に向かった。そして「間違ったことですからマテウスを殺しませんでした」と報告した。すると老女は人が変わったようになり、後に語った言葉によれば、「できることなら処刑させていた」。だが彼女は女で、しかもディオゴは家中でも地位が高かったので、彼を追放し封祿のすべてを取り上げるにとどめた。ディオゴは喜んで財産すべてを後に残し、妻とともにドン・アントニオの地に向かった。着くと教会の修道士たちに「今回の件で、良心に咎めを感じべきことをせずすんで、心より安堵しています」と語った。

【訳注 1】 Dahi a seis dias poz o Fixo em pax o negocio daquelle christão que tinha tomado a espada ao gentio.

<松田訳> 「肥州はその六日後、(かの) 異教徒から刀を奪い、(かくて) かのキリシタンの事件を穩便に調停した」

【訳注 2】 ...e com as mãos alevantadas...

<松田訳> 「手を合わせ」

¹⁸ おそらく紀伊の高野山のこと。ここには広大な墓地があり、多くの日本人の墓碑や墓がある (PAPINOT 316; RAMMING 331-332)。

【訳注 3】 ...a quinta-feira da cea...

洗足木曜日のこと。

<松田訳> 「聖木曜日の前の水曜日」。

第 74 章

堺でディオゴ了瑛の娘モニカに起こったこと、また彼女の死を前にして 母親がどのような経緯で改宗したかについて

司祭たちが都を追われ、堺に引き揚げた後にも、異教徒はわれわれを忌み嫌うのをやめなかった。そして自分たちが暮らす通りに司祭を受け入れるのは不吉だと考えた。^{いさか}諍いや面倒なことに巻き込まれたいくなかったのである。ディオゴ日比谷了瑛は町でも指折りの実力者だったが【訳注 1】、もし司祭を庇護したのが彼でなかったなら、司祭をかくまうための通りを見つけることは大変な困難がともなっただろう。潜伏場所で司祭たちは身を潜めて暮らし、外に出なかったのも、噂になったり話題に上ることはほとんどなかった。ただ屋敷の後方にあった小さく暗い蔵に祭壇をしつらえさせたため、連日キリシタンがミサを聞こうと押しかけ、また日曜日と祭日には通常の説教もおこなわれた。

この了瑛ディオゴにはモニカと言う娘がいた。彼女は第 59 章でとりあげたルイス・デ・アルメイダ修道士の書簡にあった通りに、日々善行を積んで周囲の鑑となっていた。そうした折、まさしく彼女の暮らす町の、彼女の暮らす通りに司祭たちが移って来たので、図らずもこれまでより自由に秘蹟を受けたり、ミサに参加して説教を聞いたりする機会に恵まれ、そのことを心から喜んで実行した。

ところで同じ通りに、モニカの父ディオゴの親戚筋にあたる男も住んでいた。^{そうせい}宗井という富裕な異教徒で、同じく町の有力者の一人だった。当時 20 がらみの^{そうきつ}宗札という息子がいた。ディオゴと宗井は、モニカがまだずっと小さかった時分に、互いの子どもを結婚させる約束を交わしていたらしい。そればかりか幼少時代モニカは、宗井の屋敷で 1、2 ヶ月を過ごしたこともあったという。もちろんどちらの親子もまだ異教徒だった頃のことだ。時を経てモニカが、デウスより授けられた天与の美貌や美徳、気立てのよさによって、堺のみならず他国でも知られるようになると、地位が高く裕福な貴人たちから、ぜひ嫁にと望まれるようになった。わけでも^{くだん}件の宗井の息子は目に見えてモニカに執着していた。そしてしつこいまでの伝言を了瑛に送っては、縁組みを認めてくれるよう説きふせようとしたが、父娘にそのような考えは全くなかった。宗札は意図したことが妨げられ、名誉も傷つけられたことから（堺の町衆の間では、この件に関する彼の執心と、父娘の拒絶による不首尾とがすでに知れ渡っていた）、ついには最終手段に訴えることに決め、彼女を拉致するための策を練った。

ディオゴはいたって慎重な男だったので、宗札が何か企んでいるという噂を聞くと、災いをもたらし得るすべての要素をひとつずつ取り除いていった。そして日曜日と祝日に娘がミサに出かける際には、宗札の屋敷の前を通らないでよいよう、敷地内の人目につかず、司祭の隠れ家に近い場所にある裏口を通して、気がつかれずに出て行かれるようにした。しかし宗札は計画遂行のためのチャンスを虎視眈々と窺っており、とくに日曜日や祝日には彼女を拉致するために、念入りに様子を探らせ人数を張りこませている。

ある聖母の祝日に、秘密の裏口の鍵を管理していたディオゴの下僕が、役人と一緒に町を出てしまったことがあった。けれどもその時には、当初の疑惑から数カ月がたっており、宗札もかつての執心を忘れたかのように、伝言をよこさなくなっていたので、娘が晴れの日のみさに表の道を通って行っても、さほど不都合はないとディオゴには思われた。もとより隠れ家までは5軒しか離れていなかったのである。またこのように慣れた道を、わずかな距離だけ通って行くのに、警固の者をつける必要はないと思われたので、お付きの侍女を2、3人つけただけで送り出した。ところが宗札はいかなる機会も逸す気は毛頭なく、とりわけこのような日には、武器をもって身がまえた者たちを屋敷に待機させていた。そこで彼女は前を通ったとたん、宙に持ち上げられ奥に連れ去られた。宗札はすぐに武装した仲間を守りを固めさせてから、ことの成行きを見守った。というのも、ディオゴには親類縁者が大変多く、町で大きな力をもっていたからである。

混乱と興奮の中、大勢が武器をもって駆けつけた。その騒々しさは驚くべきものだった。ことの経緯を知った異教徒たちは、非はすべて司祭にあると考え、次のように言った。「パードレたちがいるからには、このような混乱は引き起こされてしかるべきだった。ディオゴがパードレをかくまったのは明らかな失態だ。短期間でこのような不名誉がふりかかったのではないか」。また当時はまだ異教徒だった了瑛ディオゴの妻も、今回のことを非常に悔いて（既に述べたように、娘を自分の実の兄弟と結婚させたいと願っていたのだから、なおのことである）、司祭達に冷たく手厳しい手紙を届けてこう言った。「こちらに避難していらっしやった時から、そなたたちの存在が辺りにとんでもない災禍をもたらすのではないかと危惧していました。今回のことで住民ははなはだしい不快感をそなたたちに感じていますので、このまま留まっていらっしても身の安全はさだかではないことでしょう」。ただしこの伝言について、彼女の夫はつゆも知らなかった。

了瑛に対する友人縁者たちからの説得はしつこく煩わしかった。彼自身はきわめて慎重で分別があり、注意深く洞察力にとんだ男であったが、娘を溺愛しており（それももったもな事だった）、また縁者たちにしつこく責められたこともあって、ついに持ち前の節度と重々しさを失い、自らの大家族と多数の息子たちのことも忘れさり、娘が拉致された日の同日午前中、ついに武力によって宗札から娘を取りかえそうと決めた。そして大勢の武装した仲間たちを率いて監禁場所に向かった。

このような展開からは多くの死や火災、憎しみや混乱が引き起こされるとしか考えられなかったので、司祭たちはミサを終えるとすぐに祭壇の前にひれ伏し、額を床につけて、「どうか主よ、御慈悲を垂れたもうて、悪魔が仕組んだこの突然の嵐を鎮め、平穏をお与え下さい」と魂の奥底から祈った。

ディオゴは血気盛んに、二度にわたって従者たちと一緒に宗札の屋敷の入口を突破しようとしたが、腰ぬけだと思われなためか、門は開け放してあった。そして入口はとても狭く、屋敷内の抵抗は激しかったので、了瑛の身内たちは危険を察知して彼を引き留め、腕を掴んで無理やり家に帰らせた。聡明な了瑛は、一族の名と名誉が汚されるのを防ぐた

め、策から抜け出すための別の策を考え出し、宗札の父親宗井が出てくるのを待つことにした。折よく宗井が出てくると、待ちかまえていた仲間と一緒に腕づくで捕え、屋敷に連れ帰って閉じ込め、娘を返すまでは帰さないと告げた。

そのまま6日間か7日間が過ぎた。その間モニカは初めに座った場所から少しも動かず、寝る時も壁にもたれたまま眠った。また片時もコンタを離さず、ひたすらデウスに祈りながら過ごした。夜には、見張りが寝入った隙をつかまえて、司祭達に長く立派な手紙を書いた。そこには次のように書かれていた。「わたくしの罪深さのために、パードレ様、父上母上、縁者の者たちに、このような憂慮と不快を与えてしまい、胸がはりさけるような思いでおります。ですが主デウス様は、たった今もわたくしの味方となり、わたくしを支えて下さっていますので、どうかご安心ください。なぜならわたくしは心身ともに弱り、その上宗札は何度も胸に長短を押し当てて脅すのですが、わたくしは主デウス様の教えに反することに首を縦に振るぐらいなら、死を受け入れた方がよいと固く心に決めているからです。ですから父上と、キリスト様と同じくらいよき存在であるパードレ様が、よしとされること以外のことを、一切いたすつもりはございませぬ」

その頃ディオゴの身内たちも8日から10日にわたって解決策を話し合っていた。だが2人を夫婦にする以外に打つ手はないと思われた。なぜならもし彼女を力づくで取り戻そうとすれば、彼女を殺してから自分も死のうと若者が決意していたからである。そこで「もしモニカが説得すれば宗札もすぐキリシタンとなろう」という見通しのもと、縁談をまとめることに話が決まった。彼らは今回のことを自分たちの問題として考え、双方が払った努力の結果をつりあわせるために、モニカが無償で父親のもとに返されること、宗札の父親宗井も屋敷に帰ることを命じた。そして皆がこの結末に満足した。

宗札がデウスについて話を聞く決意をしたので、司祭たちは慎重に少しずつ彼に説教を施した。その結果彼は驚くべき理解力を示してキリシタンとなり、その後にモニカと正式に結ばれ婚姻の秘蹟を授かった。彼は、妻がデウスから授けられたよき性質や人間的魅力に敬意をもち、また彼女から直接励まされたこともあって、まもなく五畿内で最もよきキリシタンとなって、ルカスという洗礼名を与えられた。ルカスは告解と聖体拝領の秘蹟を頻繁に受け、自らすすんで慈善活動にいそしみ、教会の司祭たちとも気さくに接して、1日の大半の時間を教会で過ごすほどだった。また布教にも熱意を示し、教会のためになることや施しをする以外の欲はもっていなかった。貧者を憐み、飢えた者を喜んで屋敷に招いた。まだ年若く、しかも無秩序で放縦な堺の空気を吸って育ったにもかかわらず、廉直な生活を送り、異教徒が罪を犯したり破廉恥な行為をしたりするのを大いに訝しんだ。さらにデウスの話を進んで聞き、ミサや説教にも欠かすことなく参加し、死ぬまで周囲のよき手本となって生きたので、堺や他の土地のキリシタンに大変愛された。

このようにして6、7年間、夫婦はよき調和の中に生き、娘と息子が1人ずつ生まれた。だが2人目の出産時、モニカの容態が悪くなり、日本女性によくあることだが、頭に血が上った。そして発熱とともに錯乱状態に陥った。が、合間に賢明さを取り戻した折には、

告解して罪を深く悔いた。錯乱時も、デウスのことと魂の救済以外について話すことはなかった。彼女が死を目前にしていたちょうどこの頃、われわれの主デウスは、あることの道具として彼女を用いられた。というのは、すでに彼女の父親や兄弟は改宗して 5, 6 年が経っていたが、母親だけは決してキリシタンになろうとしなかった。そのために実直で誠実な女性でありながら、人柄に花を添えるなにか超自然的な魅力に欠けていた。彼女は一向宗徒¹だった。同じく異教徒で一向宗徒である実の母親や兄弟によってその宗派に留まるよう説得されていた。そのためいくら夫が説いても、司祭が助言しても、息子たちが懇願し励まして、彼女の頑なな姿勢を崩すことはできなかった。

このことが理由でモニカは、病気であるにも関わらず、飲み食いを拒んだ。そして数日間うちに非常に衰弱していった。母親は娘を愛していたので、近くに住む彼女のもとに毎日通い、手をあわせたり抱きよせたりしながら、どうか何か口にしてくれるよう涙ながらに懇願した。けれども彼女が受け入れなかったので泣き崩れた。モニカは当時 22 歳で、口数は少ないが言葉を正確に選んで話す女性だった。

ある日母親が彼女に何か食べるよう言い聞かせていたところ、モニカが次のように答えた。「これまで、デウス様の話に耳を傾けキリシタンとなって下さるよう、何度もお頼み申し上げてきました。この度の病にかかった際にも、やはり同じようにお頼み申し上げましたが、母上は聞き入れては下さらず、わたくしの胸は、母上ご自身と母上の魂のために締めつけられました。母上がこのように強情でいらっしゃるからには、わたくしもそれに倣って、母上の頑なさや意固地のために死に至るまで、飲食はいたさないことにいたしましょう。そうすれば未来永劫の苦しみをお受けになるだけでなく、今生でも冷淡な女と世間に噂され、お名前が汚されることでしょう。なぜなら了珪の娘モニカが死んだ訳を問う者はみな、実の母親が殺したと言うに違いないからです。どうかキリシタンになると覚悟をお決め下さい。そうすればわたくしは、気がすすみませんが、お命じになるものは食べましょう。が、どうしてもならないとおっしゃるなら、わたくしも死を心し、デウス様と世の人々の前で、母上こそがわたくしの死の最大の原因であったと訴えながら死んでいきます。」

母親はこのような究極の選択を迫られて、娘への愛によって精いっぱい力をえながら、「あなたが何かを召しあがって下さるなら、キリシタンとなりましょう」と答えた。モニカはこの約束の証と確認のために母親の手を握り、それ以降は彼女の言う通りに食事をした。司祭がそこを訪れ、洗礼を授け、イネスという名を母親に与えた。

モニカの病は 20 日間余り続いたが、生前常に示した美德を後に残しながら、ついに主は彼女の魂をお側にお召しになった。彼女はイエスとマリアの清き名を口ずさみながら逝き、後に日本中にその偉大な名前を残した²。

¹ 一向宗 (真宗)。阿弥陀を信じ、正しい行ないさえしていれば救われるとし、宗教的な儀礼は必要でないと説いた (RAMMING 73)。

² 本章は、フロイス自身が都と堺に滞在した間 (1565-1576) に書き残したメモをもとにし

【訳注 1】 : e assim, não sendo Diogo Fibia Reoquei, pessoa tão principal naquela cidade, que os tomou debaixo de sua protecção, tiverão muito trabalho...

<松田訳> 「日比屋ディオゴ了珪は（司祭達）を保護してはいたものの、この（堺の）^{まち}市ではそれほどの有力者ではなかったので・・・」。